正宗白鳥

文壇五十年

文壇五十年

序

過去を回顧しだすと、さまざまな事が限りなく眼前に浮んで来るようだが、それを洩らすところなく一々書き記したら、どれはどの分量になるであろうか。文壇に連関した範囲でも、五十余年の間の自分の見聞や経験を、記憶にあるすべてを記したら大変なことになるのだ。

自分の一生の事を書きつくしたと云う人もあるが、実は、一部分に過ぎないのではあるまいか。私なども過去

の思出は、小説として随筆として、或は、回顧録と銘を打ったりして、たびたび書いて来たけれど、それは実際の見聞、自分の生きて来た経験のすべてから見ると、九牛の一毛と云っていい。重な事大事な事だけは書いたつもりであっても、どれが本当に重要な事件であり経験であったか、分ったものじゃない。

この「文壇五十年」にも、簡単に、梗概的に、わが文壇生活の一面が述べられているに過ぎないのだが、これは私がこれまでに発表した幾つかの回顧録のうちではおだやかな、心静かな態度を持した回顧録である。今後も、

新たな回顧録を書くことがあるかも知れないが、本当に無遠慮に、自分が五十年間に接触したさまざまな文壇人についての感想をぶちまけたり、自分の、文壇人としての行動、言論をも、恥も外聞もかまわぬ態度で書くこともあるだろうか。そうしたら甚だ面白い事であるように、自分も思い、人も思いそうだが、畢竟それはよくない事ではあるまいか。昔自然主義者の云っていた現実暴露も、程度問題で、何もかも、アケスケ云ってしまっては、人間世界も味気ないものになり、汚らしいものになることであろう。底抜けの本当の事なんか書かぬように筆を謹

むべきであろうか。

この書は、筆を謹んだ回顧録の一つの見本である。

文庫版序

私は早稲田卒業後、一生の目的を極め、何によって生活の資を得ようと極めた訳ではなく、ただ翻訳の賃仕事をするとか、講義録の編集をするとかして、その時々を過していたようなものであった。偶然新聞記者の職に有りついたが、それも一生の仕事とするつもりではなかった。在職七年。在職中、気まぐれに小説を書きだして、知らず知らず文学を一生の事業とするような有様になっ

たのであった。

私は社交は狭く、世間知らずであるが、五十年あまりも文筆を採って来たのだから、文壇についてだけは、人並に知っている訳である。文壇の表裏を一通り知っていると云っていい。ここには表通りを見たまま聞いたままに叙述したようなものである。

過去を回顧しながら書いていると、さしたる事もなげに五十年の長年月を経過したらしく思われるが、どちらかというと幸運に恵まれた私だって、生きづらい思いはおりおりした事であろうと推想される。

私は老齢を重ねながらまだ生きている。文壇生活も五十年で打切られないで、何年かまだ続けられるかも知れないが、それは生き栄えがするか、或はみじめな様をさらしものにするだけであろうか。

著　者

目　次

序
文庫版序
一　小説界に君臨する尾崎紅葉
二　『金色夜叉』『不如帰』の時代
三　逍遥一喝、劇壇震う

四　日露開戦で戦争劇流行
五　名人延寿太夫と林中
六　岡倉天心、玉成会にこもる
七　翻案劇、翻訳文学流行
八　新帰朝者抱月への期待
九　劃期的な作品『蒲団』
一〇　鷗外、漱石の身辺小説
一一　真山青果の『南小泉村』
一二　樗牛、青果、泡鳴の日本主義
一三　左団次と自由劇場

一四　人気作家荷風の出現
一五　幸徳秋水への関心
一六　不可解な相馬御風の帰郷
一七　キリスト教と文学
一八　菊池、芥川、久米らの擡頭
一九　貧しい明治の文学者
二〇　第一次大戦後の総合雑誌
二一　マルキシズムの荒波
二二　桂内閣の文学奨励
二三　外国で実感した「日本」

二四　プロ文学の隆盛時代
二五　『風と共に去りぬ』好評
二六　戦時下、言論の制約
二七　十二月八日の思い出
二八　益々激化する戦争
二九　時代思想の移り変り
三〇　敗戦でも変らぬ文学、芸術
三一　帝国芸術院の誕生
三二　文学報国会と愛国百人一首

一　小説界に君臨する尾崎紅葉

――逍遥の講義、内村の講演

五十年の昔というと、私が読売新聞に奉職していた時分である。年少の身でありながら、芸術新聞といわれていたこの新聞の芸術関係の記事を担当していた。美術と文学と演劇、それに音楽までも加えて、それ等の方面の消息を伝え、批判をも下していた。それ等の批判は、今

日から見ると、幼稚粗暴はなはだしきものであったが、しかし私一個に取っては、都合のいい芸術修業になったのだ。日露戦争前後の日本の芸術の動揺推移の光景が、今回顧すると、記憶ちがいはあるであろうが、ありありと心に浮かぶのである。

明治三十六年、すなわち、日露戦争発生の前年、私が二十五歳で入社した年の秋、団十郎が死し、紅葉山人が死んだ。その年の春には菊五郎が死んでいた。それで、小説も歌舞伎も、旧いものが亡んで、新しいものが起らんとする空気が漂っていた。私は日清戦争直後に上京し

て学校通いをしたのであったが、そのころ、紅葉は「多情多恨」を読売に書きはじめていた。当時の少青年に世界知識を注入して、激励し煽動していた徳富蘇峰は、心機一転しかけて、魅力ある空論から脱出せんとしていたらしかった。団十郎は、独自の革命劇たるいわゆる活歴芝居の代表作「重盛諫言」や、江戸歌舞伎の標本である「助六」などを演じて、日本の演劇史上に最後の印象を留めたのであった。

私は少年期に、故郷において、江戸文学や明治の新文学に親しんでいたが、新刊小説でも、田舎にいて読むの

ではあきたらず、それ等が発刊されている東京で読みたかったのだ。そこに写されている都会のさまざまな風物、人間の行動、会話に直接に接触しながら、それ等の小説を読みたかったのだ。小説でさえそうであったのだから、芝居やキリスト教の説教などは、新聞雑誌で、その面影をうかがうだけでは物足りなかったのはいうまでもない。

私は上京後、学生生活の数年間、田舎で憧憬していた都会のさまざまなものに、飛びつくような思いで接触したのであったが、今それ等を回顧的に整理して見ると印象の深いものは、学校では、坪内逍遥の沙翁講義、それ

に関連した文学や演劇に関する随感随想。学校外では、内村鑑三（万延二―昭和五・三）の聖書関係の講義と西洋文学の講演。それと、団十郎、菊五郎の演技とであった。逍遥の講義振りや感想は、是非如何にかかわらず、今なお断片的に記憶に残っている。内村のは、上京後最初の暑中休暇で帰省する途中、興津で開催されていたキリスト教夏季講習会に参会して連続カーライル講演を聴いて以来、機会ある毎に、彼の講演は、一つも残すまじとして聴きに出掛けた。神田の青年会館で、月曜講演と名づけて何回か続けられた文学講演は、最も面白くて、

熱心に聴いたものであった。ダンテ、ゲーテ、カーライル、ホイットマン、ブライアン、ローエルなど。文献としてどれほど正確であったか、批判も当を得ていたか否か不明であるが、とに角、学枚で聴く学究的講義とはちがって、生気潑剌（はつらつ）たるものがあった。彼の口から出ると、聖書地理でも実に面白かった。坪内逍遥（安政六・五・昭和一〇・二）は、自分が学生時代に最も楽しみにしていたものは、新富座で団十郎の芝居を観ることであったといっていた。内村は、高等学校にて西洋歴史担任の当時、古本屋で、カーライルの「クロンエル伝」を一円で

買ったのだが、それを読んだために、権威に屈しない覚悟をきめたなどと、文学講演の間に秘密の心境をもらしたこともあった。彼は歴史や詩歌は愛好していたが、小説は嘘を書くといってきらい、芝居のごときは極度に排斥していて、私もそういうものかと思ってはいたが、そう思わされたため、かえって、小説や芝居に魅惑されたのであった。禁制の木の実を食うような楽しみだ。

私は、回顧して、逍遥の講義振り、若かりし時代の内村の講演調、団十郎の旧套打破の台詞（せりふ）回しが、今聴くが如く思出されて、彼等の仮声（こわいろ）を私は使い得ると自信して

いる。

私はあのころ、紅葉の愛読者であった。「多情多恨」（明治二九・二読売新聞）や「隣の女」（明治二六・八読売新聞）などは幾度読んだか知れない。今も読みたいと思っている。一度、知人に連れられて二葉亭を訪問したことがあったが、彼も紅葉の愛読者であって、「自然主義の作品は面白いが、そうかといって、以前の小説をみな排斥するのはどうかと思う」と、紅葉を心に置いて、そういっていた。

明治二十年代には、紅葉（慶応三・一二—明治三六・一

○）は、新進批評家や知識人から非難されながら、小説界に君臨していた。そして、二葉亭（元治元・二―明治四二・五）の「浮雲」（明治二二・七都の花）や、逍遥の「書生気質」（明治一八・六―一九・一）などは、最初の人気は間もなく衰えて、私が小説を読みだしたころには、絶版になって、容易に手に入らなかった。明治が三十年代となり、博文館創立十周年記念として、「太陽」が臨時増刊を出した時、これ等の旧作品が収集されたので、私などは、その時はじめて読むことを得たのである。

今の文壇では、その紅葉が光を失い、「浮雲」などが

浮き上がって、盛んな批判のまととなっている。文学作品の浮沈推移も不思議である。

二　『金色夜叉』『不如帰』の時代

――樗牛・天外の活躍

日清戦争（明治二七・七）後から日露戦争（明治三七・二）までの日本の文壇は、意気揚がらない趣（おもむ）きがあった。小説では「金色夜叉」（明治三〇・一読売新聞）と「不

如帰」（明治三一・一一―三二・五国民新聞）の時代であって、この二篇は、小説読者の興味をそそり広く流布したのであったが、峻厳な文学批判に堪えるような作品ではあるまい。いわゆる通俗臭が濃厚である。そして、当時の文壇は家庭小説などと呼ばれていた作品が跋扈（ばっこ）していた。菊池幽芳（明治三・一〇―昭和二二）とか渡辺霞亭（元治元・一一―大正一五）とかの、大阪の新聞小説が読書社会に歓迎されていたことによっても、当時の小説の風潮の低調さが推察されるのである。

評論では、高山樗牛（明治四・一―三五・一二）が群

を抜いて目ざましく活躍していた。今から見て内容は大したものではなかったが、デタラメの造語沢山の漢文調が、青年読者の心に詩のように響いていた。傍若無人の筆鋒（ひっぽう）であったが、当時の文学に対する不満の感じの現れているところが、読者に共鳴を覚えさせたのであった。明治以来今日までの評論家で、彼ほどにぎやかに勢いよく働いた者はなかったのである。そして、内容は粗雑であり、ニーチェでも日蓮でも、どれほど深く理解していたか怪しいのであったが、体裁は評論でありながら、そこには青春の詩が現れていたのだ。

明治は時代の夜明けである。そこには、新しい時代の喜び、あるいは悩みを現わした詩が出て来るべきはずであり、樗牛は樗牛なりの詩人であったといっていい。そして、当時は、多少でも西洋語の読める者は西洋の小説を読みかじって、日本の小説をけなすのが常例のようになっていて樗牛はその代表者のような態度で、日本の新作品を侮蔑し、西洋諸国の有名作家の名と作品の名を持ち出していた。

それで、私が読売の文芸欄に初めてたずさわった時分には、紅葉は一代の大作「金色夜叉」が行きづまって苦

もんして、その結果が死病に取りつかれたとうわさされていた。樗牛などから、この大作の不始末について、無慈悲な罵評を浴びせかけられたりしたのを私は読んだ事もあった。紅葉門下や、他の方面の新進作家も、進んで行く前途の目当てがつかないようでそれぞれに持っている才能も、思わしく発展しないような有様であった。樗牛は時代精神を写せとか、文明批評を試みよとか、物知り顔にいっていたが、作家にとっては、そんな理窟は空論視されるだけであった。

ところが、この時、新進の小杉天外（慶応元・九―昭

和二七・九）が新たな文学態度で創作を試みようとした。ゾラの創作態度から感化を受けたらしく、「自然は善でもない美でもない」だから、醜でも悪でも、人間の行為をそのままに描くという写実主義を製作の標準とした。これは、樗牛の首唱した、空漠たる時代精神説や文明批評説とはちがって、作家がそれを心に潜（ひそ）めて筆を採り得られるような、実際に即した製作標準となるのであった。天外のゾラ研究なんか、はなはだ浅いものであったようだが、とにかく彼はそれによって目を開かれたのだ。それで、彼は「楊弓屋の何時間」とかいったように、現実

の見聞の写生を試みたりした。ゾラが大袈裟に現実の世相調査をやったのを、天外は手軽く、断片的に、小規模でやった。

天外は、「初姿」（明治三三・五・二六新報）「女夫星（めおとぼし）」など、書下しの単行本を出して、多少文壇の注意をひいていた。私が新聞社に入った時には、天外は「魔風恋風」（明治三六・二読売新聞）と題した女学生をヒロインとした小説を、読売に連載していたが、これは「金色夜叉」以来人気のわいた小説であった。金色夜叉は、高等学校の学生を主人公とし、「魔風恋風」は、目白の女子大学

の生徒らしい女学生を取扱ったので、それが、若い男女の興味をひいて、作品の価値を一層高めた所以（ゆえん）であった。ところがこの小説は、決して写実ではないのだ。在来の硯友社の作品以上に写実に徹したものではなかった。この小説が当ったため、新聞社の要求により、「コブシ」（明治三九・三読売新聞）とか「長者星」（明治四一・九―四二・八読売新聞）とか、続けて新作を連載したのであったが、志するところはよくって、筆は伴わなかった。世は力ずくだという意味を現わさんとしたのが「コブシ」であり、富豪の致富経路を描かんとしたのが、「長者星」

であったが、これ等は一般の読者受けも「魔風恋風」に比べるとガタ落ちであった。そして文壇は、天外を他所目(よそめ)に見て、暗黙のうちに新気運を醸(かも)しつつあったのだ。私は新聞の文芸欄記者として、そういう時代の推移を見ていた。

それと同様に、団菊死後の劇壇の動揺推移をも、私は劇評担任の関係から、たとえ傍観的であっても、まざまざと見ることができた。団十郎死後には、大阪から片岡我当（後の仁左衛門）が、歌舞伎座に招かれたのだが、文壇の実生活のみすぼらしさとはちがって、劇界は派手

で表面の景気はよかったが小うるさい、面倒くさい、表裏のはげしい陰険な存在だったのだ。文壇に比べて、当時の劇界を少しばかり回顧して見ようか。

三　逍遥一喝、劇壇震う

――始めて確立された上演権

片岡我当は争闘心に富むはげしい性格の俳優であったらしい。団十郎が大阪の歌舞伎座のこけら落しに出演し

た時、我当も地元の人気役者としてその座に加わったのだが、役不足のためか、あるいは、俳優王団洲の倨傲(きょごう)を憎んだためか舞台で団洲にタテついて、罵声をも放ったそうであった。それで、彼は団十郎死後の舞台に立つために上京すると、まず団十郎の墓に参った。前非後悔の現われか、世人の歓心を買うためか。これも、芝居の一ふしみたいなものであったが、こちらから折れて出るとかえって反感を買うものもあるのだ。団十郎の余香が漂っている歌舞伎の舞台を、我当の如き先輩侮蔑をあえてしたような不遜な役者には踏ませないと憤る者さえあっ

た。劇評家のうちでも、杉贋阿彌（がんあみ）、松居松葉、岡鬼太郎の、いわゆる三人組は、共同一致我当排斥の筆を弄していた。当時の新聞には、いろいろなスポーツがまだ盛んにならない時代であったためか、演芸記事や演劇批評が広い場面を占めていた。それで、我当の演技も三人組の筆によって、さんざんにこき下ろされていた。伊原青々園、三木竹二は、態度を同じゅうして我当擁護に当っていた。

しかし、二の替りになると、我当の懐柔策が功を奏したらしく、劇評家の態度も穏やかになった。そして、二

回目に我当の出すことになった「寺子屋」について、俳優と劇通合同の研究会が、ある芝居茶屋で催された。研究の結果我当のふんする武部源蔵は袴をはいて出ることになった。源蔵は寺子屋の師匠だから桧姿がふさわしいというのである。文学なら写実主義というところか、団十郎なら活歴主義というところか。高慢で自惚(うぬぼ)れも強いらしかった我当でも、芸人だから批評家の意を迎えなければならなかったのであろうが、劇壇の知恵者たる劇評家どもが、そんなへ理窟をいって、演劇改良をしたつもりなのはおかしい。昔の芝居にそんな理窟をいいだした

ら限りがないのである。

寺子屋研究で気をよくした劇評家連は、続いて、忠臣蔵研究会を山城河岸のある貸席で催した。劇通仲間での鬼才とも言うべき岡鬼太郎の忠臣蔵の批評は観察鋭利で面白かったと、私は今でも覚えている。この時は八百蔵（後の中車）も参会した。この役者がこういう会に出るのは珍しかったか、団十郎の後継ぎはおれだと思った上の出席であろうと云った者があった。ところが、八百蔵にもそういういい運は向いて来なかったのである。団十郎死後の俳優の離合集散のはげしかった事を、私はいま

も覚えていて、彼等の栄枯盛衰の跡がしのばれるのである。八百蔵はあの会の時、一通り義理を果たすと、事に託して早めに帰って行ったが、帰るにのぞんで、両方の肘を張って平伏しながら、左右に目を配ってあいさつしたのが、おのずから芝居じみていた。参会者のすべてに万遍なく目を配っているなんか、昔の役者のたしなみなのであろう。いまごろの俳優はそうじゃあるまい。

さて、我当は、歌舞伎座での二度の興行を終ったあと、団洲門下に劣らぬほどの人気を得たので、東京に腰をすえて、翌年春、東京座に招へいせられて、芝翫（しかん）（後の歌

右衛門）とともに「桐一葉」を演じた（明治三七・三）のであったが、これはいろいろな意味で記念すべき興行であった。日露戦争がこの興行のはじまらんとする時におこったので、興行者は急速に立案して「桐一葉」のあとへ、切狂言として、戦争物を一幕添えたのだ。芝翫は看護婦に扮した。こんな事よりも、演劇史上に特筆すべきは、文学者の抱負ある苦心の脚本がはじめて堂々と上演されたという事である。それまでにも、松居松葉が初代左団次の依頼により上演用の脚本を書いたり、紅葉の「夏小袖」（明治二四・一二読売新聞）などが上演された

りしたが、劇界の内部にも外部にも重きを置かれたものではなかった。「夏小袖」では、児島文衛のおそめが面白い演技で見物を喜ばせて、この芝居は新派の売り物になっていたのだが、作者紅葉には何等の謝礼もしなかったらしい。流行作家紅葉は、小説の印税にも芝居の上演料にも全く恵まれなかったのである。世事に通じていた紅葉も、そういう自分の身の上の大事な事には気がつかなかったのである。明治の作者気質がそこに見られる。「桐一葉」だって、興行者は、上演すれば作者が有難がるだろうぐらいに、常例により文学者を安っぽく見て、

勝手に上演に取りかかり、一応のあいさつだけ述べるつもりで、座付作者を使者として、熱海の宿に逍遥を訪問させた。逍遥は劇場経営者の非礼の態度に激怒し使者を恐れおののかしたのであった。その次第は、逍遥のおどるような筆致で、新聞記者の私にあて詳しく知らされた。その手紙は、故郷の弟の図書館に保管されているはずだが、これは逍遥の書状中最も面白いものの一つであり、日本演劇の史料の一つであると、私は思っている。文学者として劇界に対して、溜飲の下がる思いのされる書状である。

四　日露開戦で戦争劇流行

――好調「桐一葉」・新作「敵国降伏」

劇場の使者の「手すりゴボウのもみ手をして」頓首平伏しての嘆願振りを、傍にいた逍遥夫人が見るに見かねて、口添えして、ようやく上演許可となったのであったが、上演となると、ところどころ削除したり、継ぎ足したりしなければならぬところがあった。それで、逍遥は、

使者である狂言作者竹柴某に命を下し、一々指図して、原作を整理し書き改めさせた。竹柴は、その温泉宿の別室で、夜を徹して、戦々兢々（せんせんきょうきょう）、冷や汗を垂らしながら、筆を採ったのだそうだ。「あの時は寿命の縮まる思いをしましたよ」と後日竹柴は語っていた。しかし、逍遥先生も、内心自作の上演を喜んでいられたにちがいない。

一字一句も、劇場関係者の勝手な変更を許さない事など、いろいろな交渉があって、いよいよ上演と決定すると、伊原青々園は、森川町の下宿に私を訪ねて来て、今度こそ共同して大いに応援しようじゃないかと、私を勧

誘した。私も他の芝居とはちがって、傍観態度を採ってばかりはいられない気がしたので、直ちに同意した。それではどういう風に応援したらいいかときくと、「まず登場俳優を訪問して、彼等の持役に関する感想をきいて、新聞に連載しろ」と、青々園は答えた。劇評家として新米の私は、まだ個人的に俳優に接触したことはなかったのだが美術家や教育家や学者からは、不断訪問記事を採っていたので、役者の苦心談筆記ぐらい何でもなくこれで応援の義務が果たされればお安い事だと思われた。

先ず我当を木挽町（こびきちょう）の旅館に訪ね、それから高麗蔵（こまぞう）（後

の幸四郎）に東京座の茶屋で会った。学者や美術家とはちがって、俳優は、ことに歌舞伎役者は、あたりがいい。態度も話しっぷりも、相手の気をそらさぬように振る舞っていた。私のぶっきらぼうな問いに対しても、愛想よく答えた。それについで、淀君役の立女形（たておやま）の芝翫（後の歌右衛門）を訪ねるはずであったのだが、私はそれを躊躇した。まだ故郷にいた年少期の私は、東京には、団十郎、菊五郎、左団次という上手な役者の外に、女形として、艶麗無比の福助という役者のいる事を聞かされていて、上京後その舞台姿を実際以上に空想で補って歌舞伎

的女性美の標本として夢心地で見ていたので、現実の彼に直面することを面映(おもはゆ)いように感じた。幻滅を覚えるのを恐れた。私の記憶に残って思い出を豊かにしている彼の雪女郎姿や、五代目の勘平とともに色の世界を心行くまでに写しだしていた彼の、道行のお軽の姿態が野暮な苦心談なんかによって、あえなく消えてしまいはしないかと危ぶまれた。

それで、私の俳優訪問は芝翫を除外した二、三人で終を告げた。「桐一葉」には、開戦のために気づかわれたのにかかわらず、営業的にかなり成功したようであった。

戦争中には鷗外の「日蓮上人辻説法」が歌舞伎座で上演された。かつて、徳田秋声の回顧談をある雑誌で読んだことがあったが、そのなかに、日露戦争中は、文学も演劇も沈滞して、どの劇場も閉鎖されていた。「そりゃひどいものだったよ」なんていっていたのを、私は人の記憶のあわれさの一例として記憶している。閉鎖されるどころではない。戦争芝居などが盛んに行われるばかりではなく、逍遥、鷗外の文学的作品が上演されたほどの勢いであったのだ。団菊死後の唯一の名優とされていた左団次は、病身をひっさげて「敵国降伏」という新作を上

演したのであった。

これは戦争前のことだが、鷗外の新作「両浦島（ふたりうらしま）」が新派の伊井一座によって市村座で上演された時岡鬼太郎がその演技振りを評して「役者がみんな金魚の入ったガラスビンを両手でささげて舞台を歩いているようだ」といったのを私はおもしろいと思った。大家先生の御作だというので間違いを起こしてはならぬと、恐る恐る演じているということなのだ。俳優などはお素人衆の作品をバカにするとともに、一面、学者先生の作品を、訳もわからずにおそれたりするものであるらしい。団十郎は、

当時の学者先生の意見をも取り入れて演劇改良を志していたのであったが、時々は好劇学者の批評に対して「失礼ながら、あなたは芝居をご存じないのではございますまいか」といったそうである。現代の名優吉右衛門の如きは、彼の接触する学者先生の演劇説に対して、いかなる感想を蔵しているか。

逍遥は「桐一葉」上演を許可してからは、劇場の望むにまかせて続々自作を上演させた。「牧の方」（明治二九・一早稲田文学）「孤城の落月」（明治三〇・九新小説）「名残りの星月夜」「お夏狂乱」など。劇場の求めにより新

たに書き下ろされたこともあった。そして、歌舞伎座に胸像のすえられるほどに歌舞伎のなかに浸潤された。しかし、それが先生の多年夢見ていた演劇のために、どれほどの効果があったか。

日露開戦布告の号外の出た明治三十七年二月六日の晩、すなわち「桐一葉」上演の準備が進まれつつあったころ、日本美術院員の同人によって、寺崎広業の支那漫遊の送別会が、上野公園の梅川楼で催された。この時私ははじめて、岡倉天心の酔余の気炎を耳にしたのであった。

五　名人延寿太夫と林中

――天心・雅邦・玉堂

岡倉覚三（文久二・一二―大正二・九）は、みるから団体の統帥者たるにふさわしい堂々たる風采をしていた。肥満したあから顔は、東洋の豪傑らしく、水滸伝中の人物の面影があったので。その音声もおきまりの破（わ）れ鐘の響きを発散するのかと予想していると、落ち着いた、繊細な音色（ねいろ）をもらすのであった。しかし、杯を重ねるにつ

れて、その繊細な声も毒舌のきびしさをおびた。なんじらは画家に非ずと喝破するのだ。画家の資格はない。絵の書けるのは雅邦先生お一人だ。お前達はやめてしまえと云う。この会の主客の寺崎広業は洋服の膝に両手をおいて、酔い顔をゆすぶりながら「ハイ、私は紙くず拾いになります」と答えた。「それがいい」との天心の仰せだ。そばにいた橋本雅邦は真面目くさったとりなし顔で「先生がああおっしゃるのも、諸君を励ますためなのだ」となだめていた。あとで川合玉堂にきくと「岡倉先生、いつもああいうことを云うんだよ」と玉堂は笑っていた。

天心の独裁ぶりや、容赦なき批判は、その後私の目に触れ耳に入ったが、天心主宰の美術院の画風も、新を求めながら、迷路をたどっていたのであった。団菊死後の劇壇、紅葉死後の文壇同様、当時の美術社会も、混迷し動揺していて、新進の徒もまだ自己を発揮し得ないのであった。

その時代にはまだテーブルスピーチというものがなかったので、この広業送別会では、天心の毒舌がテーブルスピーチ代わりになったのだが、毒舌のあとで、余興として、延寿太夫の美声で「吉田屋」が語られた。私など、

うっとりとして聞いたのであった。私は、芸術記事の担任記者として、上野の音楽学校の演奏会へ行ったり、日本音楽会へも出掛けていたが、教会のオルガン伴奏の讃美歌を聞いていたぐらいで、西洋音楽には何の教養もなかったのだから、ろくな鑑賞のできようはずはなかった。

先ごろある会合の席で、生理学者に聞いたのだが、日本人は耳の構造が西洋人とはちがっていて、先天的に音楽を味得する力が乏しいというようなことをいっていた。日本人は耳よりも目の働きがひいでている。だから、日本では絵画がすぐれていて、音楽は幼稚であるらしい

と、生理上の仮説としてとかれていた。日本音楽と西洋音楽とを比較すると、われわれにもそんな感じもせられるのである。しかし日本人も持って生まれた耳の感覚相応に古来音楽をたしなみ、自国の音楽を発達させて来たのである。私も幼いころから音楽は好きであった。笛の音にも、さもない民謡にも陶酔することがあった。

学校で、マコーレーのミルトン論を学んだ時に、その中にアフリカなどの野蛮人は、彼らの好みにかなったい音楽を聞いていると首を切られるのも気にしないで、死を忘れて陶酔するというような意味の事が書かれてい

るのを読んで、さもあるべき事であろうと感じたのであった。田舎に生まれたため、西洋音楽はいうまでもなく、日本音楽でろくなものは聞かなかったので、遺憾にも音痴の如くになっていたのであったが、東京に来て以来、おそまきながら耳にする名人の音曲は面白かった。他の芸術では得られない陶酔の境地に誘われた。ベートーヴェンとかモーツァルトとか、何とかの、西洋の名人の名曲は、人間の魂を浄化し、この世に天国の夢を夢みさせるのであろうが、それは私などの耳ではとらえ難いまぼろしであるとして、江戸時代に心中をはやらせるほどの

魅力を発散したため、治世者に弾圧された豊後節(ぶんごぶし)系統のふるめかしい音曲に、アフリカの蛮人と一味相通ずる陶酔的悦楽を覚えていたのであった。

芝居の下座(げざ)音楽だって面白かった。寺崎広業の送別会に、延寿の清元を聞いたので、思い出したのだが、広業は無名時代に常盤津(ときわず)の林中の家に間借りしていたそうだ。そのころ不遇で貧しかった林中は日常独りで自分の芸をみがいていたと、無名画家としての広業自身の努力を追想するが如く、広業は述懐していた。

そして、その林中は団十郎に認められたのであった。

清元は下衆（げす）だといってきらっていた団十郎はむしろ品のいい常盤津に好意を寄せていたのだそうだ。そして、常盤津の伝統の格をはずして飛躍していた林中を抜擢した。団菊死後の歌舞伎座の舞台で、羽左衛門、梅幸が「関の戸」で、彼等の青春の色彩を描いた時、団菊両名優の最後の大所作事（おおしょさごと）ともいうべきこの「関の戸」を語ったはずの林中が、タコ足の見台に向かって、この二人の有為の青年俳優の舞台行動に魂を吹き込むが如く、奔放に語ったのであった。「顔はへなちょこでも、うまいなあ」と、西の二階桟敷の劇評家席で杉贋阿彌が叫んだ。周囲

みなこれに同感したのであった。羽左衛門の関兵衛が団十郎と菊五郎の身振りをちょっと真似て踊った面白さを、私は追懐している。

しかし、その名人林中も、晩年には寄席芸人になった。私は、毎晩のように聴きに行ったのだが、しまいには、いやになった。いくら名人芸であっても、連続した常盤津聴聞にはあき果てた。そして延寿がますます栄え、奇才林中が不振になった経路は局外者の私にはわからない。

六　岡倉天心、玉成会にこもる

――「文展」脱退、常陸海岸の美術郷

私が美術記者になりたてのころ岡倉天心は、下村観山、横山大観、菱田春草など、腹心の門下生を従えた欧米旅行から帰って来ていたらしい。天心は英語によく通じ、当時としては、西洋知識に富んでいたはずだから、東洋を後進国として卑下し、西洋を先進国として一途に尊崇していたかというと、そうではなかったようだ。服装で

も彼等一行は和服で世界を渡ったそうであった。美術に関しても国粋党であった。それでは絵画の製作において、日本の伝統を守って行くかと思うと、そうではなかった。日本美術協会の団体の守旧的であるのに反して、岡倉主宰の美術院は、旧套を打破して、新味を発揮せんとしていた。

優秀なる門下生は岡倉の傀儡（かいらい）である。岡倉脳裏の絵画が門下生の手を使役して描きだされるのであると云われていた。あのころ、美術院の絵画朦朧派だと非難されていた。画面が鮮明を欠いて朦朧としているためか。大観、

春草などは没線描法を主唱し、その理由を説いた小冊子を作成して、美術批評家に配布したことがあった。私などは、上野の広小路あたりにあった「伊予紋」という料亭に招かれて大観などから直接にその説明を聞かされた。線を没することによって、余韻余情が画面に漂うのか。私は説明されても、没線描法の真意はわからなかったが、とにかく、紙上において批判を試みた。相手の説くところを裏返しにして見て行けば、何とか批評はできるのである。後日、田山花袋が、露骨なる描写、平面描写を唱えた時も、それを是認するか、否定するか、どう

にでも云えたのである。

岡倉は美術院の経営には財政的に困難していたらしい、はじめて「文展」という政府経営の展覧会が創設され、各種の美術団体が合流した時には、美術院もそれに加わり、岡倉はじめ門下の数人は、この官設展覧会の鑑査員となったのであった。春草の「普賢菩薩」だの、「落葉」だのは、この時分に優秀な作品として推薦せられた。

しかし、妥協性の乏しい岡倉は、官設展覧会では美術上の自己の抱負をみたすことができないのを知って「文展」から退却した。論争して喧嘩別れしたのであろう。

そして新たに、自分の好みにかなった団体を組織した。玉成会と名づけたが、これは美術院の復活なのだ。彼は、数人の部下を従えて都会を離れて、常陸の海岸に移住し、そこに美術研究所を設けたりしていた。私は、玉成会発会式その他の会合の席での彼の独裁ぶりや、型破りの行動を興味を持って見ていた。

岡倉が常陸の五浦の海岸に美術郷をつくったのは、日露戦争から二、三年後であった。初秋のころであったが、五浦の連中は美術関係者を招いて、秋の一夜を楽しもうと企てた。不眠症や胃腸病のためにあまり旅行を好まな

かった私も、職務上出かけることにした。上野から汽車に乗ると、五浦行の旅客が幾人か乗っていたが、そのうちで、樋口龍峡と、私と同郷の洋画家徳永某（万朝報のさし絵画家）とには、面識があったので、その二人の側に私は座を占めた。私は汽車の中で読むつもりで、ケリー英訳の「ダンテの幻影」を持参していた。これは、汽車旅行の退屈さまに読むに適した本ではなかったが、当時の私は、薄い紙でつくられた小型のこの詩篇を携えて断片的にあちらこちらを読むことにしていた。学生時代に、内村鑑三からダンテについてきかされて以来のこ

とである。

「ぼくもケリーの訳でそれを読んだのだが、和田垣さん（経済学者で文学愛好者）は、この詩を暗記していて、ある時すらすらと暗誦したよ。ぼくなぞそんな真似は出来ないね」と、龍峡は云った。「ただ暗誦するのならたやすいでしょう。意味を理解するのはむずかしい」と、私は云った。和出垣さんは、源氏を英訳したほどの学者であるにしても、ダンテの真意はわかるまいと思ったのであった。

五浦では、波打際に、いろいろな食べ物店が、点々と

置かれていたところに、ただの園遊会とちがった趣があった。サザエの壺焼きなどが珍しがられた。そして、岡倉邸の庭では、近村の音頭取りを招じて、盆踊が催された。岡倉夫妻もその踊りの仲間に加わって、大いに踊り狂った。

私の泊まりは大観邸であったが幾人かの客がおそくまで、面白そうに飲みもしゃべりもしているのをよそに、私は寝づらい思いに悩まされた。翌日午後、私は龍峡、徳永二人と一緒に五浦をたって、途中、手賀沼に寄って帰京した。池の端で龍峡に夕食を振る舞われたのであっ

たが、美術家の宴会にはよく顔を見せていたお俊という老妓が、そのとき座にはんべった。私はその浮世話を聞きながら、終始沈黙を守っていた。「君はからだの加減がよくないようだね」と、龍峡がその夜の別れ際に云った。

私は下宿へ帰ると、旅中一行も読み得なかったダンテを、眠れぬままに、ところどころ読んで見たが、ダンテがそのころの演劇に、ちょっと関係があったのだ。

七　翻案劇、翻訳文学流行

――真剣な文学態度の誕生

島村抱月（明治四・一―大正七・一一）は、英国滞在中、よく芝居を観ていて、その見物記を、新小説に寄稿していた。「滞欧文壇」の一部である。そのうちに、当時の名優として日本にもよく知られていたアーヴィングの一座所演の、ダンテの地獄篇の舞台の有様が詳しく記されていた。地獄篇のうちでも、パオロとフランチェスカの恋愛光景は、最も人の興味をひくので、西洋では、いろ

いろな作家によって戯曲化されているらしい。日本でも、日露戦争後に、松居松葉が、ダンテの詩篇を材料としたある西洋劇を翻案して、本郷座で河合武雄などの一座で上演させた。通俗化した脚本ではあったが、とにかくダンテを日本の舞台に紹介したのは、空前であり、あるいは絶後といっていいかもしれない。

むろんダンテの味は断片的にも出ていなくって、舞台面は卑俗低調であったので、私などは非難攻撃の筆をふるった。それに対して、松葉は、畳一枚の長さの、墨痕淋漓（りんり）たる書簡で、私にあてて抗議を押しつけた。小山内

薫（明治一四・七―昭和三・一二）は、当時真砂座に立てこもっていた伊井蓉峰一座のために「ロメオとジュリエット」の翻案劇を製作した。それについても、私はシェークスピアの原作にてらして翻案の拙さを指摘した。年少気鋭の小山内は、是が非でも黙ってはいられなくって、雑誌「歌舞伎」で、私の所説に対して反駁を試みたが、それが縁となって、私は小山内と交わりを結ぶことになったのであった。西洋の名作を日本の舞台に取入れねばならぬので、不完全であろうとも間違いだらけであろうとも、そんな事で気おくれしてはならないと小山内はい

っていた。

日露戦争があったために、文学でも演劇でも、西洋に目を向けられるようになったのだ。真砂座では「サッホー」が上演された。左団次は、シルレルの「ウィリアム・テル」や、ユーゴーの「エルナニ」を上演した。西洋物輸入は結構だが、どれも蕪雑(ぶざつ)で、不得要領で、私などには、観劇興味はそそられなかった。日本物の新作では「魔風恋風」だの「おのが罪」だの「乳兄弟」だの、通俗小説の焼直しが続々と上演されていた。新派俳優ばかりでなく、芝翫、高麗蔵など優秀なる歌舞伎役者も、そ

れらの俗悪芝居をやって、新派と対抗するつもりになっていた。団菊死後は、在来の歌舞伎にかじりついていては、時代に取残されるであろうと、彼らは気づかっていたのであろう。

同じ西洋輸入にしても、文学方面は演劇とちがって、もっと本質的であった。真剣であった。戦争開始前であったが、私が新聞記事として、文壇人の消息を採集していた時分、小栗風葉（明治八・二—大正一五・一）から、紅葉が門人瀬沼夏葉と共訳の形で、ロシアのチェホフとかいう作家の短篇を翻訳しているという事を聞いた。私

はこの時はじめてチェホフの名を聞いたのであった。夏葉訳のチェホフ短篇集は、終戦後に出版されたのであったが、そのころには「ブラックモンク」と題する英訳のチェホフ短篇集が丸善に取り寄せられていた。チェホフというロシア名前そのものにも、当時の青年作家は魅力を感じたらしく、その作品からは、これまで読んだ西洋諸国の作品に見られない新味があるように感じさせられたのだ。ロシアふうの「物のあわれ」の歌われているような、彼の小説や戯曲が、戦争には一応勝ったつもりの日本人の心に訴えるところがあったのか。

モウパッサンは、戦前から、粗製本の英訳でよく読まれていた。短くって、話が面白いので、この作者のものは、日本でも英訳によって頻繁に翻訳されていた。島村抱月は、終戦直後に帰国したのだが、その時の雑談のうちにロンドンで「モウパッサンの女の一生が新たに翻訳されて、書店に出ていたが、朝うずたかく積まれていたその小説が晩にはすっかり売り切れるという有様であった」と云っていた。ロンドンの読者などは、女の一生や、さまざまなモウパッサンの短篇を、ただ面白ずくで娯楽本として読みっ放していたのであろうが、日本では、深

刻なる人生研究書みたいに取り扱われたりしていた。私も、モウパッサンの長短篇を、遊び半分の面白ずくで読むばかりでなく、人間究極の真相をそこに見たつもりであった。ゴルキーといい、イブセンといいあのころ日本文壇でもてはやされていた外国作家は、当時の青年文人（私もその一人であったが）から一かたならぬ敬畏をもって仰ぎ見られていたのであった。

文学に対しての真剣な態度が、いつとなしに日本の文壇に起ったのであった。それは日本文学史を通じて空前の文学態度であった。尾崎紅葉なども、文章には刻苦勉

励して、そのために生命を縮めたのであろうと推測されるほどだが、文学を堅苦しく生真面目に取扱い人生の諸問題解決の鍵みたいに考えてはいなかった。全く遊びを欠いたような小説は、紅葉その他古来の作家の考えもしなかった事だったが、そういう考えが日露戦争後の日本の文壇に発生したのだから不思議である。世界の文学史にも珍しいのだ。私はいま回顧して、そうなった経路をたどることに興味を覚えている。

八　新帰朝者抱月への期待

――注目を浴びた「破戒」「蒲団」

早稲田から派遣された留学生島村抱月が欧州から帰国したのは、日露戦争が終結した時であった。私は横浜まで出迎えに行ったのだが、その時、講和条件に不満であった海軍のある軍人らが、軍港の呉かどこかで、東郷の旗艦の三笠か何か、自分達の乗っていた軍艦を爆沈させたという報道を、ある新聞記者が興奮した調子で話していた。

そういう軍人心理は、私などには分からなかったが、帰国早々そんな噂を耳にした抱月は、勝ち戦にも暗い影の伴うことを感じたらしかった。抱月は、ロンドン滞在中旅順陥落の吉報に接し、在留同胞主催の祝賀会に参加した時、戦勝の詩を作って、席上で朗読した、「将軍剣を撫す時は、天に風雨の響きあり」といったような調子であった。

抱月は、大国ロシアに勝って国威大いに揚がったところの日本に帰って来たので、文学の上でも、この勢いに乗じて大いになすあらんとしていたようであった。文壇

全体でもそれを期待していた。今までの文壇洋行者のうちで抱月ほどその洋行価値について期待された者はなかった。ことに私など早稲田関係者は、帰国後の抱月の言行については目を見張っていたのであった。

まず早稲田文学が抱月主宰の下に復活（明治三九・一）することになった。私は、大みそかの夜、玉突屋から、森川町の下宿に帰ると、机の上に新刊の早稲田文学が届いていたので、飛びつくようにそれをひらいて、目を注いだ。巻頭には「囚われたる文芸」と題する抱月の評論的感想文が、さんらんたる光を放っていた。欧州文学概

論を美文調で述べていると評すべきものか。私は興味を持って熟読したのであった。文壇でも、抱月帰国後の第一声として好意を寄せて受け入れたようであった。抱月は、続いて「ルイ王家の夢の跡」と題して、ヴェルサイユの宮殿を審美学上から解釈し、批判した美文調の古跡見物記を書いた。シェークスピアの墓にもうずる記をも書いた。「山恋い」と題する小説をも創作した。この小説は、東京の浅薄な文明的生活に嫌悪を覚えた女性が、故郷の山を慕って、都会を去るという筋立てであったと、私は記憶している。そして、この作品は、一片の概念を

まとめただけの乾燥無味の作品で、抱月に期待をかけていた多くの文壇人を失望させた。

復興の早稲田文学は、当時の雑誌界では華やかな存在であり、売れ行きもよかったのであったが、抱月には沈滞している文壇を覚醒させる力はなかった。文壇に新味を注ぐ趣きもなかった。西洋から何を持って来たかと疑われそうであった。

ところが、日本では、戦争の刺戟もあって、旧態を打破せんとする新気運が、どことなくきざしていた。文壇でも、夏目漱石の作品は、今までに類のない、珍しい面

白い作品として注目された。文壇以外の読者にも面白がられた。島崎藤村の「破戒」（明治三九・三）は破天荒の作品の如くにもてはやされた。今まで等閑視されていた国木田独歩の旧作品が清新味を発揮するようになった。それから、田山花袋の「蒲団」（明治四〇・九新小説）。

抱月はこれらの小説を読んで、日本の文学には新しい時代の来たことを感じたのであろうが、小説よりも、花袋が先頭に立って主唱した自然主義論に接触して、深い感銘を得たのであった。つまり抱月は、西洋で学ぶよりも、帰国後に日本の文壇から学んだのであった。「囚わ

れたる文芸」のなかには、西洋の自然主義文学の特色も語られてはいたが、その文学は啓発されて人生観照の態度を新たにするようなことはなかった。それが日本に起った文学運動や、文学作品によって、彼は目をさまされた思いをしたのであった。抱月はむしろ後進者の所説に、真面目に耳を傾けたのであった。他の文壇の先輩の如く、後進の、ハメをはずしたような所説を冷笑し侮辱することなく、それに共鳴し、そこから新生命をくもうとしたのであった。そして、まだしどろもどろの趣があった後進者の文学観を検討して、条理を立てて、立論すること

に努めた。「人生観上の自然主義を論ず」（明治四二・六近代文芸之研究）や「懐疑と告白」（明治四二・九早稲田文学）などは、今なお傾聴に値する明治期の人生論として、私は読み返した。

「懐疑がまだるっこいとか、時代遅れだとかいうものがある。滑稽ではないか。まだるっこければ、一足飛びに解決なり理想なりに行くがよい、われらは安値な解決理想の多きに苦しんでいる。懐疑は幾ら微細のものでもそれが真実である限り、貴い。解決理想は、それが真実であり得るかが、まず疑問である」

あの時の抱月の人生論文学論はこういう所を出発点として進行しているのだ。日露戦争後の日本の実情を背景として、抱月の所論に深い意見が感ぜられるのである。これとともに、花袋の「蒲団」の表面的にも内面的にも、日本文学史上、不思議な威力を蔵している作品であることを、私はこのごろになって痛感した。あれは一種の革命家の宣言書である。

九　劃期的な作品『蒲団』

――日本文学新気運の先進

自分の経験した一生のいろいろな事件や、自分を取り巻いている肉親縁者や知人の行動を瑣末（さまつ）な事まで、あなぐり、詮索して書き立てることを、小説の本道のように思う気運が起こったのである。「蒲団」を機縁としてこの気運が起こって、とどまる所を知らぬ有様となったのは不思議であるが、そういう気持は人間の心に深くねざしているともいえようか。

昔々、人間が字を知って物を書くようになった時は、まず自分の見聞きしたこと、経験したことを書きたがるのはあたりまえであるが人知が進むにつれて発生した小説や物語には面白い趣向をこらすのが常例となっていた。近代日本では、坪内逍遥の「小説神髄」（明治一八・九―一九・四）によって、馬琴一流の荒唐無稽の文学は排除されて、世相の真実を写すことを小説の本領であると主唱され、はじめて新時代の文学の道が開かれたのであったが、作家の日常生活の記録みたいなものを純粋の小説であるとは、逍遥も考えていなかったし、その追

随者も考えてはいなかった。現実の人世に材料を取っても、面白いものを書こうとする製作態度にかわりはなかった。

紅葉に「青葡萄」（明治二八・九―一一 読売新聞）という小説がある。新聞に連載された小説であるが、紅葉の多くの新聞小説のうちで、唯一の異色ある作品である。寄寓している門下生（風葉）が、青ブドウを食ったために、赤痢かコレラかの伝染病にかかったことを主題として、日常の師弟関係などの実生活を叙述したもので、小説らしい作為のない作品である。紅葉の作品としても、

あのころの文壇の作品としても珍しいもので、「私小説」と言っていいようなものであった。

藤村は「水彩画家」（明治三七・一新小説）とか、「並木」（明治四〇・六ふた昔）とかでは、知人をモデルとして、そのモデルに肉薄した筆使いをしたのであったが、小説の形において自己の日常生活を直写することは、まだあえてしなかった。「水彩画家」では、ある画家をモデルとして描きながら、それに託して作家自身の体験や心境を描いたので、モデルにされた画家から抗議を持ち込まれたほどであった。藤村はまた直截に、あらわに自

分を描き出そうとはしなかった。この作家が腰をすえて自分を徹底的に紙上に描き出さんとしたのは「春」（明治四一・四―八朝日新聞）からであった。「破戒」と「春」との間に、藤村の製作態度は一変化したのであった。そしてその変化をうながしたものは、花袋の「蒲団」から受けた刺戟であると私は思っている。花袋は、露骨なる描写とか平面描写とかを唱えたり、人生観にも創作態度にも、熱心に旧套打破を試みたのだが、彼自身はその志した所を実現し得なかった。しかし、バカ正直に、捨て身になって、信ずる所に向かったので、他人に何かの感

化を与える力を持っていたのだ。

藤村は花袋の小説や論文から感化を受けたとは思っていなかったであろう。いわんや「蒲団」のような作品を読んで、感にうたれるはずはない。それでも、「蒲団」など花袋の作品によって、しらずしらず心を刺戟されたのではないかと私は思っている。「蒲団」は、清新な作品として敬意を持って読まれるよりも、嘲笑冷罵されるにふさわしいものであったが、それでもそれが、文学史上劃期的の作品となったのだ。私はこのごろ回顧して特にそう思うようになった。

何でもないような事が、フランス革命の動機となった。日本の文学も何とかしなければならぬという気運が漠然と起りかけているとこへ「蒲団」がその気運に火をつける事になったのである。今読むと「こんな小説が何だ」と思われるような、つまらない小説であるが、このつまらない小説の巻き起こした一つの傾向が、綿々と尽くるところなき有様である。

私は、自信の強い岩野泡鳴子に「君は花袋の感化を受けて、ああいう小説を書くようになったのだろう」と聞くと「そうだ」と負けじ魂の彼も、人間が正直だから正

直に答えた。藍より出でて藍より青く、泡鳴は花袋以上の自己暴露小説作家になり、不屈不倒の自然主義主張者になったのだが、フランスのデカダン詩人なんかを憧憬していた彼も、マラルメとかランボウとかの奇異な名詩篇よりも「蒲団」によって一層多く啓発されたのであった。これによって、自己を引き出す機縁を得たのであった。

「蒲団」の感化を受けたと告白するものは、そのころでも泡鳴以外にはなかったし、今日はむろん一人でもそういうふうに考えている作家はないはずだが、たとえ当人

がそう思っていなくっても、鋭敏にして冷静なる歴史家は、人心の動きをそんな所に認めるのである。

歴史はつまらないことから回転するものである。

碩学森鷗外でさえ――。

一〇　鷗外、漱石の身辺小説

――実生活の自己暴露小説

十九世紀末の欧州の思想や芸術に接触して、ドイツか

ら帰って来た青年森鷗外（文久二・一―大正一一・七）は、「舞姫」（明治二三・一国民之友）「うたかたの記」（明治二三・八柵草紙）「文づかい」（明治二四・一新著百種）の三篇を帰国みやげとして発表した。西洋の小説のような趣があり、当時の幼稚な文壇では異彩を放っていたのであったが、ありふれた創作態度とも云うべく、小説界に新気運を起こす種類のものではなかった。その点では、二葉亭の「浮雲」ほどの力もなかった。その後の鷗外は、翻訳はしきりにやっていたし、評論や、外国の思想や文芸の紹介には努めていたのであったが、創作にはあまり

筆をとらなかった。「両浦島」や「日蓮上人辻説法」の如き上演用脚本を書いたのは、弟、三木竹二の勧告によったので、戯曲について自信があったわけでもあるまい。

ところが、小説製作には熱意を持っていなかったらしい鷗外が、晩年になって、その道の専門家になったように、続々と新作を発表しだした。それは「スバル」（昴）のような、彼自身のかかわりあいのある新雑誌が発刊（明治四二・一）されたためでもあろうが、花袋などの巻き起こした風潮に刺戟されて「こんなものならおれにでも、造作なく書ける」と気づいて、持ち前の創作才能が活躍

しだしたのにちがいない。

花袋は真剣に自己の日常生活や身辺の事件の暴露をして、それを文学の本道としていたのだが、鷗外は「なに、こんな事ぐらい」と手軽く遊び半分に扱っていたのであった。鷗外ばかりでない。文学に志す年少作家は、花袋のおかげでどれほど小説が書きよくなったか知れない。自分の毎日やっている事をそのまま書けば、それが小説なのだから、気が楽になったわけだ。

鷗外は「ヰタ・セクスアリス」（明治四二・七昴）の書き出しに、花袋一派の作品を侮蔑したような筆を弄し、

こんなものなら、おれにでも造作なく書けるという態度で、彼自身の性欲史みたいなものを書いたのであった。侮蔑したにしても侮蔑したものに刺戟されて、鷗外も晩年を創作道にいそしむようになったのだ。当人、次第に面白くなって身辺の人生世相に侵入して、妙技を発揮するようになったのだ。花袋が出て、ああいう風潮をつくらなかったら、鷗外はみずからあの作風を独創することはなかったにちがいないと私は確信している。鷗外も西洋のさまざまな名文学に刺戟されて晩年の鷗外ぶりの身辺小説、自己暴露小説を独創的に産出して世に示したの

ではなくって、花袋の未熟な、しかし、魅力ある文学に教えられて、その行く道を発見したのである。坪内逍遥は「ヰタ・セクスアリス」を読んで、鷗外もこんなものを書かなければいいのにと彼のために惜しんだそうである。しかし、花袋の「蒲団」なんかに刺戟されてこんな事を書くところに、鷗外の若さがあり、創作力の存在が認められるのである。

鷗外が花袋文学に啓発されて筆をとった最初の身辺小説は、「宴会」とか題され、新聞記者に殴られたり、殴り返したりした騒ぎを書いたものだったが、これを読ん

で、私は鷗外の喧嘩する元気と「舞姫」時代のような文章の気取りのないところに若さをしのんだ。その事を私が月評か何かに書くと、鷗外は、小山内に向かって「若々しいのではない、ばかばかしいんだ」と言ったそうであるがばかばかしいような花袋文学にしらずしらず感化されたために、晩年の豊富な鷗外文学が栄えたのである。

夏目漱石（慶応三・一―大正五・一二）の「道草」（大正四・六―九朝日新聞）は、漱石作中でも傑作の一つである。漱石の実生活が鮮明に描写されているが花袋一流の自己暴露小説が世に現れていなかったら、漱石がああ

いう作品を新聞小説として書いたであろうか。私は、漱石も、多分こんなものは書くまいと心がけていたであろうのについにこんなものを書くようになったかと、どんな作家でもまぬかれない時代の流行を思った。

自分の実生活をそのままに書くのは書きやすい事でもあり、そして、文学として意義ある事でもあるが、小説を書くほどの者はだれでも、必ずというほどに、多かれ少なかれ実生活の自己暴露小説をやらかすことになったのが、私には鼻につくのである。

とにかく、花袋（明治四・一二—昭和五・五）以前「蒲

団」以前には、自分の日常生活をそのままに、暴露的に書いた小説はほとんどなかったように私は思っている。花袋は現代の小説道の先駆者である。先駆者としてのおごりを感ずるよりも、きまりの悪い思いをしたり、気恥ずかしい思いをしたり、嫌われたり憎まれたりしたのである。それがこのごろはみんななれっこになって、平気で何でも書けるようになった。

どの国でも、先駆者の作品は時を隔てても光彩を放つはずのものであるが、「蒲団」などは、先駆者の作品でありながら、時がたつと色があせた。それで、だれもが

あんな小説の感化を受けているとは思っていないのだが、しかし、冷厳な歴史家の目で見ていると、みんなが感化を受けているのである。受けなかったのは泉鏡花一人か。

一一　真山青果の『南小泉村』

――新派の脚本作家としての成功

小説読者は楽しみに小説を読むので、人生研究のため

に小説を読む者は滅多にあるまい。観劇は浮世学問になるのだが、だれも学問を志して劇場に行く者はあるまい。小説作者だって演劇作者だって、大抵は読者や見物を念頭において筆をとっていたので、面白く読まれるように、見られるように考えていたのにちがいない。

それなのに、花袋などの唱うる所によると、小説は真実を写すもので、面白ずくで書くものではないという事なのだ。小説は真実に徹するもので遊びではないという事なのだ。しかし、藤村も花袋も独歩もあるいは泡鳴でさえ、詩人出身なので、その小説には詩の名残りがあっ

た。言葉の上にも、人物の取扱いにも詩人らしい心くばりが見られた。彼等のあとから出て全く詩や歌を身につけていない真山青果（明治一一・九―昭和二三・三）及び私などは、彼等先輩とは、製作態度が異なっており、作品そのものの味わいは異なっていた。どちらも面白い小説の書ける柄ではなかったし、また面白いものを書こうとは志さなかった。はじめ文壇の花形の地位を占めてはいたが、どちらにも花形らしいはなやかさはなかった。おれ達は競馬ウマのようにされると、青果はいっていたが、私は彼に対して競争心もなかった。

そして、私は、青果の小説を好まなかった。彼は売出したころ、中央公論の一年間に、九度、読切りの作品を寄稿したほどの勢いであったが、私には何の妙味も感じられない小説ばかりであった。ただ、私は、彼の処女作とも、出世作とも言うべき「南小泉村」（明治四〇・五新潮）だけには、小気味のいい、テキパキした書きぶりに痛快味を感じたことを記憶している。東北の農民を、情け容赦もなく、あるがままに描いている。後年のプロレタリア作家の見せかけの農民の態度とは全く異なっている。ヒューマニチーといったようなものは「南小泉村」

の作者には全く見られない。こういう態度で書いた小説が読者に喜ばれるはずはない。長い間埋没されていたこの「南小泉村」が、このごろ文庫本で出たため、今日の批評家の目にも触れて、物好きに批判する人もあるようだが、こういう人間愛欠如の小説が、今日の読者の心を動かすはずはない。

ところで、青果は、原稿二重売りがたたって、小説発表の道が途絶されたので、脚本作者として糊口の資を求め、自己胸中の鬱憤をも晴らそうとした。青果は早くからおりおり私を下宿に訪ねて来たことがあったのに、私

の方から彼を訪ねたのは、彼が最も窮迫の境地に押しつめられた時であった。私は自ら進んで、青果訪問なんか試みる気持にはなれなかったのだが、秋声（明治四・一二―昭和一八・一一）に誘われてうかうかと、神楽坂近所の彼の家へ入って行った。家の中はガランとして空家みたいであった。二階の彼の部屋で、三人が、ただの机を囲んで座って何かと話をしたが、周囲荒涼を極めていた。「おれのものはこの机だけだ。こいつもたたき売るかな」と、これを奥州なまりでいって、すこやかに笑った。自暴自棄とか絶望とかいったような暗い影を持った

笑いではなかった。「君はいいなあ」と、私に向かっていったが、そこに「うまくやってるな」といったような口ぶりは見られなかった。

黙阿弥の「島千鳥（しまちどり）月白浪（つきのしらなみ）」（明治一四・一一）というどろぼう狂言には主役として、松島千太と明石の島蔵とが活躍していて、千太は愚図っぽくて、ねちねちした理窟をこねるところに、東北人らしい趣があり、島蔵は、目先が利いて、世才にたけ、物分りがいいところ、瀬戸内の生れらしいところがあり、そういう所に黙阿弥の頭の働きが見られるのである。私は青果を松島千太として

空想することがあった。初代左団次の役である。それでは、さしずめ私が瀬戸内生れだから、明石の島蔵という役どころかというと、これは全然そうでない。私がもし、五代目菊五郎の扮したような島蔵であったなら、窮境に陥っている千太のために、何かの打開の方法を講じたかも知れない。あるいは世間知に富んだ意見をしたかもしれない。白浪同士の間の感応があったかもしれない。

とにかく、少しずつでも名声の上向いている私と、不遇に悩んでいる彼とが、汚れ机を前にして何かを語っているのが、現代劇のいち場面ともならずに終ったのであ

った。老役（ふけやく）の秋声が座に加わっていながら、これも気乗りのしない話振りで、座は劇的に引き立たなかったのだ。

しかし、青果は新派の脚本作家として成功したのであった。左団次などのためにも、綺堂以後の名脚本と言われるような脚本を書いた。小説では面白くないものばかり書いていたのに芝居では面白いものを書いたとすると不思議だ。それから「南小泉村」の百姓を情け容赦なく書いた彼が、旧劇脚本として忠君愛国の気概を見せるものを書くようになったのだから不思議である、

数十年の昔になるが、東京の下町生れのある作家が「私

のきらいなのは、高山樗牛と岩野泡鳴と真山青果だ」と、たぶん何の気なしにいったであろう言葉が、執拗に私の心に印象された。それを今また思い出した。

一二　樗牛、青果、泡鳴の日本主義

――封建道徳の沁みた明治の先輩

思いあがった者、粗野な者、無作法な者、そういうものは、江戸人にはいやがられていたのであろう。高山樗

牛（明治四・一―三五・一二）は一代を風靡していた論客であって、颯爽たる文章で「文明の批評をせよ」とか「時代精神を描け」とか、力説していたが、それらは群小作家に対する空漠たる注文であって、彼自身には、時代精神の理解も、文明の批判もあったとは思われない。ニーチェから日蓮、それから日本主義の強調というところなのだが、名目は同じ日本主義でも、泡鳴（明治六・一―大正九・五）のそれとは、内容がまるで違っているのが面白い。泡鳴の半獣主義、刹那主義、生々主義などは、樗牛の詠嘆的日本主義とは全く異なっていた。

泡嶋の所説については、私は雑誌や本で読むよりも、口角泡を飛ばしてしゃべるのを聞いたのであったが、何でも主義化しているようなのが、こちこちと堅苦しかった。人間はせつなせつなに生きているだけの事。「超人」も「死後」も考慮の外であって、つまり「死ぬ奴はバカだ」というのである。古事記の記事を例にとって、生々主義を強調するなんか、勇ましさの限りであったが、この泡鳴哲学は、仲間うちに冷笑をもって迎えられていた。

樗牛には幼稚な詠嘆的な「滝口入道」（明治二七・四読売新聞）のような、あんなものが、今なお読者に喜ばれ

ているらしいが、泡鳴は、詩人でありながら、彼の哲学にも作品にも、通俗でいうところの詩がなかったため、生存中にも死後にも一般の読者うけはしなかった。青果と泡鳴との作品には、読者を面白がらせるところ、読者のあまい涙をさそうところが全くなかったのである。まだしも、泡鳴のには、自分の所行をそのまま書いたものが多いので、おのずから、脱線的行動の面白さや、滑稽味のあるところもあるのだが、青果の作品はいかにも人好きのしないものである。

私は、青果の脚本では、井上正夫一座によって上演さ

れた「平将門」（大正一四・一中央公論）を本郷座でみたことがあった。これは力作であり力演であったのにもかかわらず、見物席は寂寥としていた。舞台の方に人間が多いくらいであった。劇場に見物人の少ないくらいみじめなものはない。それで、青果も、雑誌用の小説では、読者を無視した作品を書き続けて、思う存分、自己の本領を発揮していたらしかったが、脚本においては、俳優の好みにかなったもの、見物の喜びそうなものを書こうとしていたらしかった。新派俳優のためには、婦女子の涙を誘うような通俗脚本、左団次などのためには、東洋

風の英雄主義や忠君思想を取り入れた脚本を製作した。岡本綺堂以上に、堅苦しい日本主義が、青果の脚本には幅をきかせていた。むしろ、綺堂の方に、舶来思想が微見していたから不思議だ。青果は、「南小泉村」の脚本化はしなかったのである。

樗牛、青果、泡鳴のそれぞれの日本主義を検討すると、現代文学史の一面が、私の心にもありありと浮かぶのである、西洋文学の模倣が力強く歩を進めている間にも、日本主義をうちくじかれなかった。日本は他の東洋諸国とは異なって西洋文明の模倣をやったため、国家として

進歩の道をたどったといわれていたが、日本人は日本人であり、日本主義はしつこくつきまとうのである。私は明治時代の諸先輩がいずれも封建道徳の日本主義を心身に具えている事を知って興味を覚えているのである。

岡倉天心がかつていった事がある。今の小説は婦女子を泣かすにとどまっているが「星亨（ほしとおる）を泣かすような小説は出て来ないものか」と。剛腹不遜な星亨、政治界の大親分を泣かす小説の書ける作家はえらい作家であるというのであろうが、私はそう思わなかった。星亨とか、頭山満とか、乃木大将とか、日本の英雄豪傑を泣かすに

は、浪曲師をして神崎与五郎東下(あずまくだ)りでもうならせたらそれでいいのではあるまいか。千代萩の飯焚(めしたき)の場を見せたら、日本の豪傑連、涙潸然(さんぜん)たるのではあるまいか。天心御自身も、神崎与五郎や乳人(めのと)政岡に涙を流すのではないかと、私は妄想したりしていた。

天心は、東洋の理想を説き、西洋に対する東洋主義日本主義を力説したようであった。その有名な「茶の本」(明治三九)は、私は早くから原文で読み、あとで日本訳ででも読んだ。お茶の起源も哲理も、いわれ因縁を聞くと面白いのであるが、しかし、天心が、茶の湯を玩味

すると同じような気持で絵画を鑑賞し、茶の湯なみに、新日本の美術を創設しようと企てたとすると、その態度の是非について、私は疑惑を抱くのである。竹内栖鳳（せいほう）は、若い時分、西洋に上陸して、はじめて、ジョットーなど西洋の古美術に接した時、日本の絵画は余技ではないかと思われたといったのを、私は雑誌か何かで読んで、この断片語を栖鳳の不用意の実感として深く感銘している。西洋の芸術にも思想にも通じていたはずの天心は、日本画を余技と思うようなみずから侮る考えは一度も起こしたことはなかったであろう。

一三　左団次と自由劇場

――青果、泡鳴らのイプセン熱

真山青果は、花袋を市川新十郎になぞらえていた。新十郎は団十郎の門下で、師匠の演技の型をよく知っていたので、後進の俳優にそれを教えていた。指導役としては重宝であったのであろうが、当人の芸はうまくなかった。青果は風葉の門人ということになっていても、創作

においては、師に学ぶところなく、硯友社の臭みなんか少しも身につけていなかったが、酔っ払って漫罵的気焔を吐くところは、ふるくさい文士気質のように私の目に映っていた。彼は花袋を冷評しながらも、その自然主義の感化は受けていたらしいが、彼は彼なりに独特の持味を発散したのであろう。彼は日本のもの、西洋のもの、それらのどれをも信頼しなかったはずであったのに、まだ上演脚本製作を家業としなかった時分、新進小説家として幅をきかせていた時分に、イブセン張りの戯曲を一篇創作したことがあった。その題目を、私はいま忘れて

いるが、題目からしてイブセン調であった。当時の日本の新進作家群は何となくイブセンを有難がっていたようだが、「何だ、青果もそうなのか」と、私は、彼のイブセン気取りの新戯曲を読んで、おかしく思ったのであった。

青果は、一とき自然主義にかぶれようとも、根柢は日本主義なので、後年西鶴研究に没頭したり、馬琴を検討し批判したりするようになったが、その青果が、初めて戯曲を試作した時は、イブセン模倣であったのだ。時代の流行にはだれでも取りつかれるのである。

そのころ「イブセン会」という研究会が出来た事にも、いま回顧すると歴史的意義が看取されるのである。何故か、数回で立消えになったのだが、参会者は、柳田国男、島崎藤村、田山花袋、長谷川天渓、蒲原有明、岩野泡鳴、小山内薫、前田晁などであった。私も、森川町の下宿から、研究会場の神田の学士会館へ、開会のたびに必ず出掛けていたが、当時私はまだイブセンをよく読んでいなかった。天渓はだれよりもよく読み西洋のイブセン評論にもよく通じていた。泡鳴をはじめ、参会者の多くは、シェークスピアなどの古典を蔑視して、イブセンを讃美

していた。泡鳴のいわゆるボンクラのシェークスピアなんかの芝居を、早稲田の劇団が上演するようでは、演劇革新になりやしないといっていた。それで、左団次が小山内と結託して自由劇場を創設（明治四二・一一）するに及んで最初に取上げた上演脚本が、イブセンの「ボークマン」であったのはイブセン会の思いつきによったのだ。左団次はそれで、新時代の流れに乗った新進気鋭の俳優として世に認められるようになったのだから、微々たるイブセン会も、左団次のためにも、新時代の演劇のためにも、バカにならぬ存在であったといってよかろう。

だけど、私は、自由劇場のイブセン劇の初日を観て、さして面白いとは思わなかった。泡鳴などが興奮して、大きな声ではやし立てているのを、奇怪に思いながら、しまいの一幕は見残して帰ったのであった。ボークマンの心境は私の理解するところではなかった。左団次のがなり立てる音声は、私の耳に不快に響くだけであった。青年は、時のはずみで面白いと感じると、わけも分からずに感激し興奮するのである。そのころの私は、身体が悪かったために憂鬱に沈んでいて、観るもの聴くものが面白くなかった。世を憂鬱に観じているのなら早稲田の

演劇団所演の「ハムレット」に共鳴したかというと、土居春曙所演のハムレットには私は馬鹿らしさを覚えるばかりであった。「殿様狂言おきらいならばさもそうず、そうもあろうよの、おきらいなるもことわり」と、はね回っているのを見ると、つまアらない気持がした。芝居はむずかしいものである。ことに翻訳劇はむずかしいものである。

私は、左団次が、経営困難の明治座を、父の死後に引継いで、悪戦苦闘していた時代にも、無慈悲な批評を下し続けた。いま回顧すると、左団次は、鈍才を鞭打って

綺堂などと結託して、歌舞伎ならぬ歌舞伎の彼独特の演劇味を発揮していたので、新代の青年層に喜ばれていたのも当然であったと思われるが、あのころの私には莚升（えんしょう）時代の彼の芝居はちっとも面白くなかった。「役者家業をやめたらよかろう」と、私の劇評のなかに書いてあったとかで、左団次ひいきから、主筆あてに猛烈な抗議が来たそうであった。

私は左団次ものでは、鬼太郎の「薩摩歌」に感心したくらいであった。多分、左団次の方では、自分の芝居を悪くばかりいっていた劇評家として私を記憶していたの

であろうが、後年になって、私が上演意識なくして書いた雑誌用の脚本が彼によって珍しくも舞台に上がったのだから不思議である。それで私の目には、旧劇畑のこの俳優は善良なる紳士の如く映ずるようになった。しかし、演劇というものは、作者の考えたことと、役者の演ずるのとは、まるでちがうのではないかと、私はわずかな経験によって感ずるのであるが、他の脚本作家はそう感じないのであろうか。

左団次は、綺堂没後には、青果の新作をしばしば上演したようであったが、左団次と青果とでは、芸術家とし

て全く柄がちがうのである。果たして意気投合したのであろうか。

一四　人気作家荷風の出現

――「鴻の巣」に花咲く文学談

青果と私とにおくれる事数年にして、谷崎潤一郎（明治一九・七―昭和四〇・七）と長田幹彦（明治二〇・三―昭和三九・五）とが花形らしく出現した。どちらも人に

面白く読まれるような小説を発表した、一朝にして名をあげるとともに、行動も花形らしく振舞っているというわさが、私などの耳にも直ぐ入っていたが、当時は今日とちがって、流行作家になったって、大した金にありつけるのではなかった。

この二人の出る前に、永井荷風（明治一二・一二―昭和三四・四）がフランスから帰って来て、色気たっぷりのものを続々と世に示したのであった。荷風は早くからゾラなどの主唱したフランスの自然主義に共鳴し、彼らの作品に傾倒していたらしく「地獄の花」（明治三五・六

金港堂）の如き、ゾラ好みの小説を書いたこともあったので、世が世なら、自然主義作家群のなかに入れられるはずなのだが、荷風帰国（明治四一・八）のころには、無風流殺風景な自然主義小説が読者に飽果てられていたので、荷風のつやのある文章、色気のある話が、旱天（かんてん）の慈雨のように持てはやされたのであった。しかし、硯友社全盛時代であったら、荷風の作品もあれほどに際立って歓迎されたかどうだか。

私は、荷風が帰国後最初に文壇に提出した「祭りの夜語り」（明治四二・一新潮）を読んで、心ときめく思いを

したのであった。この作品の書き振りに感心したのではない。空漠たる西洋憧憬のわが思いがこれによって切実にされたためであった。明治四十二年、私の而立（じりつ）の歳であったか、長い下宿屋住いに終りを告げ東片町の小さな家に老婢を雇って暮らす事になった時、まだ新進作家としての名声が衰えないで、新年号用の小説を幾つも頼まれて、晩秋から初冬にかけてぽつりぽつり書き続けていた時、私は、郵便で届けられた八月号の「新小説」を開いて荷風の「隅田川」を読んで、ひそかに感嘆した。「うまいなあ」と思った。面白いと思った。小説はかくこそ

あるべけれと思った。「南小泉村」には異様な興味が感ぜられ、小説らしくないこの小説に私の心はひかれるのであったが、子供の時分から物語小説を好んで、手当り次第に読み続けて来た私には「隅田川」のような小説は、一応面白く思われなければならなかったのだ。私は新年号にいくつも短篇を書いてはいるものの、こんな面白いものは書けないと、覚悟した。

明治以来、心行くばかり青春をうたった詩も小説も戯曲もなかったのである。独歩の小説は青春の影はさしているが、その影は薄い。筆力乏しくして豊かに描き得な

かったのだ。藤村の「春」のなかの青年にも、青春の気迫は見られない。樗牛は「美的生活」を強調したり、青春の詠嘆を試みたりしたが、読者を青春の境地に引込むには、その文章は空疎である。読んで、新時代の青春に陶酔させられるようなものはない。荷風のには青春の享楽みたいなものが、たっぷり写されているらしく思われるが、江戸の通人みたいな趣があって、潑剌たる若さはない。青年の深刻な悩みのうちに青春が渦巻いているのでもない。隠居みたいな態度で、人生の若さをもてあそんでいるようでもある。こういうのは日本伝来の文人気質

であろうか。

荷風は「新帰朝者の日記」（明治四二・一〇中央公論）「監獄署の裏」（明治四二・三早稲田文学）その他、おりおりの雑文随筆において、そのころの日本を批判していた。文化豊かな西洋を見た目で見て、日本の生活振りの貧弱さはあわれむべく、はき違えの西洋文明模倣は笑うべく、むしろ江戸時代の生活態度に親しみを覚えるのはさもあるらしく思われるが、それも空想裡の親しみだけのものであろう。自分の空想でどんな世界をも人事をも享楽するところに、文学芸術の有難さがあるので空想力

の強いものに、文学者芸術家の天分が豊かであるともいえよう。荷風はそれを知っていて、有りのままに物を見るつまらなさを、その作品のなかで言っている。「陋巷（ろうこう）に窮死するのは文人の本文なり」というような意味の感想を、まことしやかに、詩のように詠嘆的に述べた荷風の言は、私の心に印象されているが、これもその窮境振りを空想として享楽するまでの事であろう。

私は、明治の末期には、日吉町の「プランタン」というフランス模倣のキャッフェへよく通っていたが、三田文学やスバルの連中は小網町の「鴻の巣」という小さな

洋食屋へよく足を運んで、にぎやかに彼らの青春を発揮していると噂されていた。それで、私は独りでその家へ、二、三度遊びに行ったことがあったが、一度そこの主人が、私に「寄せ書き帳」を見せて、私にも一筆何か書けと強要した。私はその帳面を開いて見ていると、ふとそのうちに荷風の文句が目についた。詩に非ず、俳句に非ず。「自然主義の徒、荷風を誅せんとす」というような警句なのだ。文壇の人気を一身に集めているような幸福人荷風が、こんな事を書いてヤニ下っている有様を私は想像した。自然主義の根拠地の早稲田文学でさえ、抱月

の筆でれいれいしく荷風に推薦の辞を呈したほどだ。自然派の作家にも荷風にたてつくものはなかった。

私は、それやこれやを、この「鴻の巣」で思い出した。抱月が堺枯川一流に招かれて、相馬御風を従えてこの家で、文学と社会問題について論争を試みた事。幸徳秋水が、荷風や私の心に何かのかかわり合いをつけた事など。

一五　幸徳秋水への関心

――枯川、寒村と抱月、御風の討論

上司小剣（明治七・一二―昭和二二・九）は堺枯川と親しかったので、枯川一派の社会主義運動についてはよく知っているらしく、さような事には風馬牛相関せざる私にもよく話していた。新時代の文学者は、社会の実際問題に無関心であるべきではないという建前から、枯川とか荒畑寒村とかで、一夕島村抱月を招いて議論をたたかわすことになったと、小剣は社の編集室で私に話したこ

とがあった。その会場が「鴻の巣」であったのだ。抱月は相馬御風を従えて臨席したそうだ。私も招かれるはずであったのだが、小剣が「あの男は呼んだって、そんな会には行かないにきまっている」と、枯川に注意したらしかった。

しかし、あの時呼ばれたら、私は行っていたかもしれない。私はかれらの人となり、かれらの行動を、小剣からふだん聞かされていたので、かれらの面貌は私の空想裡には宿っていたが、直接に見たことはなかった。ただ、幸徳秋水は、衆議院の傍聴席ですぐそばに座っていたの

で、たっぷり見ることが出来た。今回顧すると、あれほどの歴史的人物としては、体軀矮小、風采があがらず、革命児にふさわしくなかった。外形の貧弱さは片山潜みたいであった。

荷風は幸徳事件（明治四三・五）に関心を持っていたらしく、文学者としてこの事件を見ぬ顔して通るのは不甲斐なく思われ、思いつめたあまりに、現実を逃避して江戸の戯作者の境地に身を置くことにしたと、かれ自身の処世態度、文学態度を、何かの機会にもらしていたことがあった。そういう文人気質もおもしろいのであるが、

ある種の批評家の問題とするように、こんな事で、荷風の思想の深さ、浅さを判断するのは不当ではないか。

幸徳秋水は無政府主義者であり無神論者であったそうだ。宇宙に神がなくっても秩序が保てるものなら、地球の人類世界に政府なんかなくってもよさそうである。私の世界観は無神有神の別さえわからないような宙ぶらりんであり、無政府主義の是非だって終始一貫して不明瞭なので、幸徳の思想に何ら共鳴するところはないのにかかわらず、警視庁かどこかの思想取締係は、私を幸徳の追随者であるかのようにみなして、ある期間、刑事をし

て私の行動を監視させたのであった。文壇で私に虚無主義というレッテルをつけたために、虚無主義者すなわち無政府主義者と、当局のだれかが勝手にきめて、私がロシアの虚無党のまねでもするかと危険がったのか。

幸徳の著書で私の読んでいるのは「キリスト抹殺論」ぐらいなものである。これは無味乾燥の故事つけでおもしろくもおかしくもないものだ。ただ私の読んだ幸徳の文章で記憶に残っていて、今回顧してもおもしろく思われるのは、彼が「万朝報」に掲げた紀行文の一片だけである。

秋水が新聞記者として東北行きの列車に乗った時、同じ二等車に数人の俳優が乗っていた。当時は、車室は欧州風に狭く区切られていたし、概して二等客は少なかったので同室の乗客の言語動静はよくわかるのであった。秋水も興味をもって俳優に注意していたのであろうが、若い俳優の梅幸が八百蔵（後の中車）に向かって、家庭の事情を話しているのが彼の耳に入った。団菊死後まだ間のないころで五代目菊五郎の養子であった梅幸は、五代目の末亡人やその他の遺族や周囲のものと折合いを保って行くことに苦労したらしかった。同じく菊五郎の養

子で、前途に嘱望された菊之助は、若くして倒れたのだが「自分の子は役者にするな」と遺言したそうである。

梅幸はついに汽車の窓に顔を当ててすすり泣きしたそうである。八百蔵はいろいろ言葉をつくして慰めていたそうである。多分役者の社会を知らなかったと思われる秋水は、その光景を珍しく感じて、それを紀行文に写していた。それで、私は幸徳というと、キリスト抹殺論や無政府主義論よりも、この紀行文を思い出すのである。

幸徳秋水は奇人中江兆民の門下生であったそうだ。死を覚悟した兆民の感想録「一年有半」（明治三四・八―九）

は、異常な売れ行きを示したのであったが内容は大したものではなかった。秋水は、無神論や無政府主義について、この人の感化を受けたのかも知れないが、兆民の、一点の曇りのない死の覚悟のごときものを受継ぎ得られるであろうか。あんな風に淡々たる気持で書かれている兆民の覚悟でもその極致は疑われるが、秋水の死に臨む心境に自ら安ずるところがあったか。

切支丹などの殉教者は、死後の復活、永遠の生命を確信しているのだから、どんな極刑も甘受されるであろうが、秋水などのごとく死後に希望のない者は、消えてなく

なる自分が「現世の主義」に殉ずるのは、意味ない事ではないかと思わないだろうか。この理窟は論じだしたら面倒くさいことだが、生きている間だけの主義なら、死をとおしてまでやるのは理窟に合わぬのではあるまいか。

一六　不可解な相馬御風の帰郷

――花袋、万太郎の御風観

島村抱月が早稲田の首領として活躍し、逍遥と別れて

演劇運動を起こしていた時分に、早稲田出身の有望な秀才として内外から注目されていた青年は、片上伸、吉江喬松、相馬御風（明治一六・七―昭和二五・五）の三人であった。年齢もほぼ同じく、暗々裏に出世争いをしているらしかった。それで、片上はロシアへ、吉江はフランスへ、万障を排して文学修業の途についたのであった。彼等が世界的進出を志していたのに反し、相馬は東京にも見切りをつけて、故郷の、北陸の糸魚川に隠退する決心をしたのであった。他の二人よりも争闘心も党派心も強そうな彼が、若隠居を極め込むのは、私などには意外

に思われ奇怪に感ぜられた。彼は離京に際し「還元録」と題する、自己の人世観処世態度を吐露した小冊子を知人に配布したほどで、余程の決心を持っていたのであろう。彼とはかなり懇意であった私にも、無論その声明書は寄贈されたのであったが、当時の私は、転居騒ぎで、その小冊子は何処かに紛失して、ついに読まずじまいで終わった。どうせ一時の気まぐれの隠退で、間もなく東京へ舞い戻るだろうと、私は独り極めに極めていた。

しかし、彼は、徹底的に、根強く郷里に腰を据えて、一生を終った。東京へは、抱月の葬儀に列するため一度

上京しただけであった。何故であるか、私は今も疑問としている。彼の離京が文壇の噂になっていた時、花袋は片上のロシア行きや吉江のフランス行きよりも、相馬の田舎行きの方が意味が深い。その態度に妙味があると、例の感慨をこめて云っていた。私には花袋の相馬びいきは何の事やら分からなかった。花のパリや、雪のモスクワの方が、どれほど魅力があるか分からないのにと、ひそかに思っていた。同じ雪にとざされるにしても、北陸のケチな田舎町よりも、雄大豪壮神秘なモスクワの一隅に身を置いていた方が、若い心を生かすにふさわしいで

はないかと思っていた。

それで、あのころの相馬の行動を思い浮かべ、その人柄を考え、おりおり耳に入った仲間内の噂を参考として、判断すると、彼の還元行為、すなわち都会退却の行為は、アナキスト大杉栄（明治一八・一―大正一二・九）などの仲間にまき込まれる事を恐れたためではあるまいか。

先ごろ「別冊文芸春秋」所載の久保田万太郎の北陸漫遊記を読み、裏日本の冬の風物と作者の心境と融和しているところに、淡々たる詩趣を、私は味わったのであったが、そのなかに、糸魚川の相馬の遺跡訪問の記事がは

さまれてあった。「サギをカラスと言いくるめていた相馬」という、久保田式の含蓄ある批判語もあった。党派心の強かった相馬は、自然主義全盛期に、抱月門下の闘士として、自然主義擁護のため、サギをカラスといいくるめたこともあったにちがいないが、固定的がんこさはなくって融通性にも富んでいた青春の彼は、自然主義にばかりとらわれてはいなかった。

永井荷風にも、何度か書簡のやり取りをしていたらしかった。荷風から、日露戦争に関するこんなハガキが来たと、私に話したこともあった。ボードレールに心酔し

感激し、その詩こそ、古今第一の逸品であるというようなことを、小人数で食事を共にしていた時にほろ酔いの顔していったことがあった。抱月に伴われて、堺枯川一派の社会革命家に会って論争したことが機縁になったのか、大杉栄と親しむようになったらしかった。そして、大杉の人生観に多少共鳴したらしかった。無遠慮な大杉は、自分と話し相手になりそうな文壇人には、進んで親しまんとしていたようであったが、相馬に対してもわが党の士といった態度を採って接近し、相馬をも抱き込んで、徒党の人数に加え、連判帳にサインでもさせそうな

気配を見せたらしい。それで、相馬は深入りして、のっぴきならぬ場合になりそうなのに気づいて、恐怖の念に駆られたのではあるまいか。

しかし、それがそうであったにしろ、相馬が田舎に腰を据えて、一生地方文化の開発に努めたことは無意味ではなかったのである。都会であくせく功名に心を労するよりも、彼に取って一生の生き甲斐があったと言ってもよかろう。あの時の花袋の批判も、今回顧すると当たっていたかも知れない。私は、相馬が離京以来、一度も彼に会う機会はなかったので、糸魚川の聖者としての彼の

風丰(ふうぼう)は知らず、才人としての青年御風の顔を思い出すだけである。

私も相馬の隠退後に、何となく都会生活がつまらなくなって、故郷に引き込みたくなった。それは、頭がかれて筆が採れなくなったとか、原稿が売れなくなったとかいうのではなく、ただ世に飽き文壇に飽いたという気持であった。人道主義の白樺派が出現しようが、享楽主義の三田派が栄えようが、私の身にはさしたる変化もなくほそぼそとした文壇生活が果てしもなく続けられるように続けられた。

そして、第一次世界大戦の余波を受けた日本の文壇が、以前とは著しく違った光景を呈するのを観ることとなった。

一七　キリスト教と文学

――バタ臭かった有島の作品

あの時分、私は白樺派とは無縁であって、その雑誌はほとんど読んだことなく、その派に属する人々にも会う

機会がなかった。読まなかったのは、その雑誌を嫌うとか蔑視したとかいうのではなく、雑誌が寄贈されなかったためであった。明治四十三年五月末日に、満七年間の新聞記者の職を退いたあとは、私の社交範囲は急速に狭まり、文壇の一隅に生存するだけの有様となった。文学、美術、演劇などに関する雑駁（ざつぱく）な批評の筆は、それを機会にぴったりとらなくなった。それで、白樺派の作家の作品も、白樺以外の世間の雑誌に出たのは読んでいたが、明治末期から大正の初期にかけて、異彩を放っていたこの派の真面目はよく知らなかった。ただその雑誌の六号

活字欄には自然主義に関する悪口雑言がしきりに書かれているという噂はよく耳にしていた。

ところが、有島武郎（明治一一・三―大正一二・六）には二、三度どこかで会って温厚な長者といったような感じを受けた。作品はひどくバタ臭いようで、西洋心酔癖のあった私でも親しめなかった。「カインの末裔」（大正六・七新小説）「クララの出家」（大正六・九太陽）など、在来の日本の小説に見られない舶来文学味があって、作家の人となりとともにその作品も感想録も一部の青年子女に随喜渇仰されていたようであったが、私にはそのキ

リスト教気どりが鼻につくのであった。私は自分でも顧みて自ら戒める事があったが、信仰を棄てていながらキリスト教を押しつけがましく作中に漂わせている態度が私には快く感ぜられないのである。

内村鑑三は、背教者有島の小説が世にもてはやされるのをにがにがしく思い「有島はキリスト教を盗んで小説に使っている」といったそうだ。聖書は思想も詞句も、すべて珠玉のごとく光っているのであるが、それを盗んでわがもの顔に利用して小説に取り入れて評判を得るのは不埒だというのである。聖書をよく読みキリスト教を

よく知って、それを文学に応用したら天下無敵であると、小説作法なんか知らない内村は空想していたのであった。私が学生時代に聞いた内村の文学講演のうちに、小説作家サッカレーは、毎日、執筆前に聖書を読んだそうだと云って、その心がけを推讃していた。紅葉山人は「不言不語」（明治二八・一―三読売新聞）を書いていた時、毎日源氏物語を読んでいたと云い伝えられていた。

しかし、宗教にとらえられたり、古典模倣を心がけたりするのは、新時代の小説家の態度としてよくない事だと、私などは、だれに聞くともなく、おのずからそう感

じていた。

小山内薫も有島同様、内村の門弟であったが、彼は有島ほど慎重ではなかったので「背信者」と題して、自分がキリスト教をすて、師にも背いた経路を、さらさらと新聞小説として書いた。それを一瞥した内村は、激怒して、直ちに「朝日」購買の中止をした、と伝えられている。それだから、軽々に門下生を信頼したり青年を近づけたりしないのがいいのである。

かくて、有島文学は甚だバタ臭いのであるが、それだけに、文章でも、人物の扱い振りでも、西洋の小説らし

い趣がある。この人の小説は甘いと言われたりしていたが、あまく思われるところに西洋小説らしい趣が感ぜられるのである。それに、長篇「或る女」のごときは決してあまくはあるまい。この作者、見かけに寄らずふてぶてしいところがあったのかも知れないが、親譲りの財産の処分に悩んだ心境なんかに、聖人仁者の影がさしていたとみるべきか。

私は、有島とは二度、懸賞小説の選者になった事があった。一度は名古屋の新聞であったが、有島の選んだ応募作品は「河畔の義人」とか題された、義人か聖人かと

思われるような人物を、極めて幼稚な筆で書いたものであったので、私はあきれたのであった。その前何かの会で仮名使いや文字制限の話が出た時、有島が、文字なんかどうでもいいという意味の意見をもらしたのを、私は耳にとめた。私もほぼ同感であったのだ。

一度は、大阪朝日の懸賞小説の審査員として、有島と、私と、厨川白村の三人が名を並べた事があった。厨川も有島も、当時は抜群の人気作者であったのだ。審査のすんだあと、三人は、新聞社に招かれて、芝の紅葉館で夕食を共にしたのであったが、張り合いのないほど静かな

穏やかな会合であった。年齢は一つずつ違いであったが、他の二人は、西洋をも知っているし、私の知らない世間を知っているらしい事が、話のうちにちらつくので、私はおとなしく傍聴するにとどまっていた。

ところが、その後一年か二年、大地震の年の初夏のころ有島はかのごとき異様な死をとげ、厨川は、鎌倉で震災にあって命を失った。そして、あの会合の席で二人の間にはさまっていた私は、三十年後の今までどうにか生きつづけている。

一八　菊池、芥川、久米らの擡頭

――大戦景気で上った原稿料

戦争は厭(いと)うべきものであるが、戦争によって、文学の面目が一新することもあるのだ。日露戦争後には、自然主義の興隆、ロシア文学の輸入などで、沈滞していた文壇に生気が注がれた。第一次世界戦争（大正三・八）の進むにつれて、日本は急速に金持になったらしく、いろんな方面で生活が豊かになったようであったが、貧乏を看板にしていた文壇も戦争景気のおこぼれにあずかっ

て、雑誌も売れ、本も売れ、金に縁のなかった文筆業者の懐も暖かくなりだしたのであった。

私は、中央公論には、四季の増ページ号には、必ず寄稿することになっていたが、原稿料は向こうまかせで、こちらから要求したことはなかった。一円、一円二十銭、一円九十銭と、時々値上げされるのを楽しみにしていた。戦争のための物価騰貴のおりは、それを理由にとくに三十銭増額された時も雑誌社は戦争景気で随分もうかっていると聞いてはいたが、そのくらいの増額も、予想外のお恵みとて有難く頂だいした。

ところが、戦争の威力で文学的活気も盛んになったらしく、新進の文学青年の態度は、私などが文壇にはい出した時とは、はなはだしく異なっていた。文壇史に一時期を劃すると云っていた。私はそのころそう感じた。菊池寛が新文壇の代表者みたいになっていたが、彼らは自信が強かった。彼らは雑誌社や出版社から、取れるだけ取ってやれと考えるようになっているのであろうと、私は推察して、それは私などのなし得ないところであると愚考していた。

私などは、原稿料は全然先方まかせであったが、新進

気鋭の彼らは、大胆不敵にも、多額の報酬を要求するそうであった。それについて、ある時、中央公論社長麻田駒之助が私に話したことがあった。

「若い方には値上げの要求をなさる資格があります。それは今のお若い方は真剣に実の入ったものをお書きになります。以前とはちがって来ました」

出版業者でもそう思っているのか、今日、戦争景気で文壇に進出した新進気鋭の作家の新作品は、これまでの作家の作品のような、元気のない、色のあせた、だらしのないものではないと思っているらしいが、私はその説

にさからう気にはなれなかった。在来の作者は、新来の作者とは太刀打ちが出来なくなったのであろうと、事実を認める外なかった。戦争はのろうべきものであろうが、世界大戦争があったればこそ、そして、日本が優勝者の地位を占めたればこそ、文学方面でも、旧時代を踏越えた新作家の活躍が見られるのではあるまいか。

「若い者が原稿料値上げの要求をするので、われわれもその恩沢にあずかる事になった」と、旧作家は、おりにふれては話合った。営利専門の出版業者でも、新進作家にだけ厚くむくい、旧作家には従来通りの薄謝ですます

のは、忍びないらしく、私などにでも、請求しないのに、続々と稿料の値上げをした。二円、三円、四円五十銭、五円、六円、ついに十円。

昔を回顧すると隔世の感がある。作家商売悪くないといった感じを、当人の作家にも起こさせたし世人にも起こさせた。小説書きになる事は、以前は父兄に喜ばれなかったのだが、世界大戦後（大正七・一一休戦条約成立）は、そうでもなくなった。風姿からして、以前の文人は、世間離れしているらしい趣があったが、菊池寛（明治二一・一二―昭和二三・三）出現以後は、世間人として、

世を広く住んでいるらしく見られるようになった。世界大戦争後の大景気も一朝の夢であって、世はまた乏しい境地に陥ったものの、一たび世間に出て世間なみに暮らすくせのついた文壇人は、昔に戻って、小さく生きる気持にはなれなかった。能なしの、根気の乏しい、気の弱い者は、仕方がないが、力のある者は、一度得た地位は失うまいと努めるであろう。それで、新時代の作家は、菊池をはじめ、芥川（明治二五・三―昭和二・七）でも、久米（明治二四・一一―昭和二七・三）でも、里見（明治二一・七―）でも、佐藤（明治二五・四―）でも、私など

の目には空前なはでな存在として映っていた。麻田中公社長の言うところの「若い作家はあなた方とちがって、原稿料の値上げを主張される資格がある」として、それら優秀なる新進作家の風姿、言語行動までも昔の作家とちがった新鮮味がありそうに空想された。彼らはすべて昔の作家とちがって、それぞれにうまいものを食って栄養をとって、わが世の春を楽しんでいるらしく、私には空想された。親しく交わらないので、どこかでちらと見るだけだから、どんなにでも空想し得られたのであろうか。

三文文士、文士貧乏の世とちがって国土豊かに文化栄

える世となったのであったが、私は潑剌たる新進のふるまいを見るにつけて過去の文壇を回顧して、人生の推移を感ずるのである。私は年少のころ読みたくもない論語を読まされて、多くの聖語をいや応なしに心に感銘させられているが、さまざまな注釈はどうであろうと、自分一個の好みで、滋味津々（しんしん）たる思いして、おりおり記憶に浮かべる詞句は「晨（あした）に道を開く、夕（ゆうべ）に死すとも可なり」と「逝（ゆ）くものは此（かく）の如きか昼夜を舎（す）てず」とである。文壇の流れを見ても、私はこの感を起すのである。紅葉の死、二葉亭の死、独歩の死、漱石の死、抱月の死など、

私にとって印象が深いのだが、逝くものは此の如きかと嘆ぜられるのである。

一九　貧しい明治の文学者
――その人生とその死

明治以来の知名の文学者の死について、私は考えている。他の社会の人々とはちがって、文学者は自分の作品を残しているのだから、この人はこれだけの事をなし遂

げて一生を終わったのだという事が明らかに分かっているところに妙味があるのである。

明治の文学者は概して貧乏であった。若死にした者が多かったが、それは、貧乏で、生活の悩みがあり、栄養も不良であったためではなかったか。二葉亭の追悼会の時坪内逍遥は、故人の実生活について語り、彼は一銭の負債もなく、一銭の貯蓄もなかったと言っていた。二葉亭が、朝日新聞の特派員としてロシアへ行った時には、多年の望みがかなったわけで、抱負も豊かであったらしかったが、モスコーに着くと間もなく不治の病気にかか

り何のなすところもなく帰国の途につき、しかも航海中に病気が悪化するばかりで、ついでインド洋で絶命したのであった。二葉亭らしい死に方で、小説の材料としては面白いのだが、当人にとってはみじめな陰惨な死であったというべきだ。肺病にかかって早世した二葉の死も、自分で自分を、才女薄命の小説人物にしたようなものだ。小説人物としては読者の詩的涙を誘うのであるが、当人にとっては陰惨至極だ。

高山樗牛は、生前、評論家として華やかに振る舞っていたが、この人も肺患にかかって若死にをして、その死

の知らせは、万朝報の欄外に三行ばかり書かれたのに過ぎなかった。当時は文人の生死なんかは、一般新聞読者には注目されなかったのだ。国木田独歩（明治四・七―四一・六）も肺病で倒れたのだが、この時は、読売新聞だけが社会面に一ページそっくりその死に関する記事で埋めた。こんな事は異例で自然主義の宣伝みたいであった。有名な政治家か軍人ならとにかく、一介の小説家をなぜこんなに御大層に扱うかと世人は奇異に感じたが、編集長も眉をひそめていた。私が強引にこんな事をしたように思われていたが、新聞記者の常識をそなえていた私は、

そんなムチャな事をあえてするはずはなかった。若い三面記者が主筆を説いて気まぐれにやったのであった。

川上眉山（明治二・三―四一・六）のような自殺か、抱月、須磨子のような場合ならとにかく普通の文人の病死が、新聞記事として重々しく取り扱われたのは、夏目漱石にはじまるといっていい。漱石の臨終の言葉として伝えられている則天去私は有名であるが、鷗外も逍遥も心を取乱さず、静かに死についたらしくうわさされていたが、果してどうであったか。緑雨が自分で死亡通知書を書残したのは、十返舎一九の辞世の狂歌みたいで、そ

の人となりが見られるのであるが、勇敢な死にぶりは、私は岩野泡鳴において見られたのであった。彼は勇敢に生き勇敢に死んだ。彼は「死ぬやつはバカだ」と言っていたが「おれはおれの頭が役に立たなくなったら、舌をかんで死ぬる」とも云っていた。彼はチフスにかかってなおりかけた時に、リンゴを皮ごと食ったそうだ。彼は、リンゴには皮に滋養があると信じていて、健康時には皮をかじっていたので、病中にも、それを実行して身をほろぼすことになったのであろう。

私は数人の知人の死に顔を見たが、だれのにも平和も

見られなければ、苦悩の力も見られなかった。死ぬるものはそれっきりといった感じがした。それぞれに人生を観たこと、自分自分の人生を生きたことをあいうふうに物に書き口にしたのであると、死者の顔を見たあとで追想していると、ああして生きて来た結果がこれなのかと、感銘されるのであるが、つまりはこれっきりかとの感じが私の心には浮かぶのであった。

島村抱月の死は、須磨子の後追い心中もあって、世間で面白ずくの噂がにぎわったのであったが、私は、学生時代から敬意を寄せて接触していたはずの彼とも、死生

について語り合った事はなかった。さまざまな先輩や友人と、若い時から、学問の話、芸術の話、世間の雑話などをし続けて来たわけだが、しかしそれにもかかわらず、本当の事は話しもせず話されもしなかったのではないかと思う事がある。死に顔を思い出していると、生きているうちに何かといっていたが、あれが当人の本当だったのかと疑われもするのである。

先ごろ、私は二葉亭の文学談筆記を、ある場合に読んだが、その中に、私が彼を訪問した事も話されていた。自殺者藤村操の事（明治三六）が話題に出て、二葉亭が

藤村も巌頭の感を書残すようではシャバに未練あったというと、私が「しかし、自分の書くものもすべて巌頭の感です」といったそうである。これは私の記憶にない事だが、その時の私でもまさかそんな気取った事は考えていなかったのではあるまいか。戯談半分の言葉であろう。死ぬる真際でさえ、本当の事はいえないかも知れない。

二〇　第二次大戦後の総合雑誌

――左翼評論の流行

中央公論は総合雑誌として権威をふるっていたが、編集者も読者も、その雑誌の小説欄に重きをおいていたのであった。政治問題、社会問題あるいは学術関係の問題につき、その道の学者、評論家の論文が掲載されることがあっても、それが売物になることはまれであった。たまに文学評論みたいなものが載せられても、それは添え物として扱われ、原稿料も軽少であった。

雑誌読者は、作りものであり、こしらえものである小説などを喜んで、時事問題、現実の社会の問題に関する検討、批判に着目する興味はなかったのか。まだそういう時事評論、社会評論を職業とする者もなかった。大正の初期であったか、社会評論らしいものをおりおり書いていた中沢臨川の、ある時の述懐を、私は興味を持って記憶している。「幕末維新のころには、青年が全力をあげて進んで行く目標があった。尊皇攘夷とか開国佐幕とか、あのころの青年としては、生命がけでやっていた事があった。ところが今は、そういう力強い目標がない。

青年として張合いがない」というのである。

幸徳一派の大逆事件もあり、社会主義運動の芽ばえもあり、民本主義の主唱者もあったりしたが、まだ左翼思想も右翼思想も一世を風靡するところまで行っていなかった。思想もつまりは流行物なのだが、明治末期から大正初期にかけては多数者がかぶれるような流行思想の動きはなかった。文壇のなかでも真剣に政治批評なんかする者はほとんどなかった。泡鳴は新日本主義を唱えてわらわれていたが、私などは何かの会合の席で、政治論を聞かされたことはなかった。現在の政治の事なんかは無

視するのが文学者の本分であるように私などは思っていたが、大抵の文壇人はそうであったらしい。とにかく、その当時、小説の原稿料は政治評論、社会評論なんかの原稿料よりもはるかに高かったことによっても、評論価値を文壇人が感じていないことが推測されるのであった。「改造」が出た時も、はじめは小説欄に力を入れて、文学作品を売物にしようとしていた。それが、いつとなく社会状態が変化して、社会評論が雑誌の上でも幅をきかせるようになったのは、雑誌としても劃期的の事件なのだ。中央公論が、大正のはじめ、最初の世界戦争勃発の

前後から、吉野作造の民本主義説などを掲載したのは、編集者の思いつきで、世間受けもしたのであったが、それはまだ微温的であったので、中央公論、改造などのいわゆる総合雑誌が、狂熱的に社会評論を売り物にしだしたのは、戦争後の日本の成金時代、それから関東大地震後の混乱時代であった。それらの雑誌社が、山川均とか、河上肇とか、大山郁夫とか、あるいは大杉栄とかの原稿を流行の小説作家の原稿よりもありがたがるような奇異な現象が起こったのを私は不思議にみていた。

それら論客のうちで、私の知っていたのは河上肇だけ

であった。河上は才人であり、人柄は温和であるらしかったが、心の底には、身を投じて主義に殉ずるような強烈な気構えがあったのか。実際はどうであったかわからないが、河上という人もマルキシズムの信者であるために、進歩的の論客であり、えらい人でもあると、私でも空想するようになった。それとともに、恐ろしい人という感じも起こるのであった。幸徳秋水、大杉栄、河上肇などについては恐ろしい人という感じがした。かれらこそ社会から迫害されていたので、河上は一度私に会った時にも「故郷へ帰っても京都へ行っても、放火人足でも

来たように警戒されます」といっていたほどであったが、当時威力を持っていたこの主義の行動者、論者には、文壇人も恐れを抱いていたらしい。進歩的思想の保持者として、敬意をよせるばかりでなく、強迫、凶暴な事をやるかも知れないと、一味の恐ろしさを私などは感じさせられたようであった。運動資金強要のための訪問に接したこともあった。

この思想が文学に侵入して、左翼論文と並んで左翼小説が、雑誌の上で勢力をふるうようになり、「これも一時の栄えである」と思われながらも、批評家もこの種の

小説に媚を呈するようになった。

坪内逍遥先生は、幸田露伴などとはちがって、時代の流行を無視していられないような文人であったので、マルクスの資本論をものぞき見されたらしく、高山樗牛のような魅力ある煽動的文章でこの資本論を説いたなら、燎原の火のごとく、すさまじい勢いを出現するだろうといっていたと私は伝聞した。逍遥は日本のマルクス論者の文章のまずさを、はがゆく思われたのであろう。私は、アインスタインが改造社に招かれて、夫婦づれで来て、むつかしい講演をした時（大正一一）に、急場の間に合

わせの日本訳「相対性原理」を少年のころ「易経」を読んだ時と同じ気持で素読したのであったが、そういう好奇心から、マルクスをも読もうとした。ところが高畠素之が、それは大変だから、これを読めと彼の編纂した資本論の梗概本を人を介して贈ってくれた。

二一　マルキシズムの荒波

――自然主義文学の衰退

「相対性原理」よりも「資本論」の方が分り易いにきまっていたが、私は飛び飛びに読んで、その理論が分ったような分らないようなところで止めにした。

私がいつも考えているように、幼少時分に受けた印象は強いもので深いもので、先祖伝来の多少の田地をもっているいわゆる地主みたいな境遇に育ったため、収穫時には土間に数十俵の米俵が積み重ねてあるのを見なれて

いて、それで心の豊かになる習慣がついていた。米俵は日本人として伝統的に尊いものとされていて、これだけ米俵があれば生きて行けるという力強い感じが幼心に植えつけられていた。その米俵は小作人が持って来るので、自分達が作るのではない。マルクス輸入以来流行語である搾取を、自分達は祖先以来実行していたのであろうと反省された。

今の世となって回顧すると、地主なんてものは、大であれ小であれ、多年の搾取行為の罰が当って、最もみじめなものになり、先祖伝来の宝物のように思われていた

田地も、取上げられてしまったのだが、米俵を積み重ねた光景は、幼いころの追懐としてなつかしくなるのである。そこに旧日本趣味のふるさが私の頭にも宿っているわけで、パン食が好きになっても米飯的日本趣味から脱出されないと同様である。

文学も時代の流れに連れ添うもので、小説でも、資本家や地主は、旧劇なら赤っ面(つら)の、悪人型で書かれ、小説家自身の日常生活においても、ほとんどすべてが、労働者小作人に味方するようになり、自分以外の他の作家も、当然そうすべきはずときめてかかるようになっていた。

その一例を思い出すと、私が、大磯に移住（大正九）して、上京すると、ホテル住まいをしていた時分だったが、大出版社のＳ社の編集員が、農民小説集出版の用件で、私をステーションホテルに来訪したことである。当時新潟地方で、小作人が地主に対して反抗運動を起していたので、それら小作人に運動費を援助するため、農民小説集を出版し、その印税を小作人団体に提供することになっていた。田舎者の私は、百姓小説らしいものを二つや三つ書いていたので、私にもその一つを小説集に寄付しろというのであった。それは当然の事と出版社の方で認め

ているのだ。人間として、文学者として、そういう尊い要求を拒絶すべきものではないと、予めきめられていた。

しかし、米俵積み重ねの地主的悦楽を幼い時分に覚えさされた私は、地主征伐のための小作人のしり押し運動に自分で加わるのは、うっとうしい気だるい思いがされるのであった。それで「私は岡山県の地主でありますから」と云って断った。相手のＳ社の編集者は、温和で、重ねて私に強要しないで帰って行ったから、よかったが、もし、正義をタテに取って押し強く要求したら、私は屈服して、おとなしく農民小説集に寄稿したかも知れなか

った。

文壇においてさえ、ややもすると、人間の自由を云々している文壇においてさえ、自由を強迫する行為が、明白に、あるいは暗々裏に行われているのを、私はたびたび見聞してきた。どうでもいいようなことには多数者の説に雷同して、申合せ状にサインするのも保身術としていいのであるが、「ああ、また、人を恐れ、強迫の影におののくか」と、自分で自分をさげすむこともあるのである。このごろ前法相犬養健の行動がいろいろにうわさされているが、彼の心境に私は人間通有のいたましさを

感ずるのである。人世の強迫におびえる気持である。英雄でも豪傑でもなく、おどおどして世に生きるその気持に、一般通有の人間性を私は見るのである。

五・一五事件といわれる犬養首相殺害のあと、その殺害者のための減刑運動が起こり、いろんな人が減刑嘆願書に署名させられたりしたのであったが、首相の令息にもその嘆願書にサインさせようとした。令息犬養健も、さすがにそれには応じかねて、逃げまわっていたとうわさされていた。私が、地主征伐小作人しり押し運動のための小説集出版に加入しなかったのも同じ気持であるよう

だ。

とにかく文壇マルキシズムのあらしもかなり長く続いた。岩野泡鳴は、生きていたらこのあらしに逆らったであろうが早く死んだ。徳田秋声は、その小説が庶民生活描写なので、左翼文学と相通ずるところがあり、自分でもそれを意識していたようであった。自然主義の元祖田山花袋は、当時元気よく書きつづけて、面白い作品も出ていたのにかかわらず、自然主義の衰運を代表しているがごとく、世間受けが次第に悪くなったようであった。

「人間、落ち目になるのはいやだ」といっていたそう

だ。歴史小説「源義朝」の出版（大正一三・一一金星堂）された時、だれが発起するともなく、祝賀会が田端の自笑軒で催されたが、その会で一通り酒が廻ると、花袋は「僕がダメになったから、君達がこういう会をやってくれた」と、感傷的に涙ぐましく云った。無論そういうつもりじゃなかったのだが、花袋の口からそう聞くと、この酒の席にも木枯しの吹いているようであった。

二二　桂内閣の文学奨励

――自力で洋行の途につく白鳥

私も長い文壇生活の間には、おりおり倦怠を感ずることがあった。半年ばかり郷里に引き込んでいたこともあった。世界戦争後東京に貸家払底していた時分に、伊香保や軽井沢で暮したり、東京では、菊富士ホテルをはじめとして丸の内ホテル、ステーションホテルから、ついに帝国ホテルに仮住居したりしていたが、そうしているうちに、かねてあこがれていた西洋漫遊を決行しようと

思い立った。

洋行についてはこういうことがあった。幸徳事件のあったあと、政府は済世会というようなものをつくって、人心を緩和しようとしたが、文学審査会（？）という、時の政府に似合わしからぬものも設立された。当時は桂内閣で内相は平田東助、文相は小松原英太郎であった。与謝野晶子によって「東助や英太郎は文学を知らず憐れなるかな」と歌われたそれ等の人々が、文学奨励を看板にした会合を催すのは、殊勝の至りであると世間は思っていたが、後日事情通に聞くと彼らの本心は文学取締り

を志していたのだそうだ。自然主義傾向の風俗に害のある小説を排斥して彼らの好みにかなった文学を奨励したかったのであろう。会員は森鷗外、島村抱月、上田敏などの純文学者の外は新聞に関係ある通俗文学者であった。新聞の主筆、編集者も二、三加わっていた。

最初の会では、新進作家の作品を選択して、そのうちのすぐれたものに賞金を与える案が出て、十六人の審査員が当時の文壇で評判の立っていた新作を幾冊か読んだのであったが、この案は成立しなかった。審査員の多数には、若い作家の新作なんか気に入らなかったのであっ

た。それで、つまりは、坪内逍遥の翻訳「ハムレット」を推薦して、賞金を贈ることになった。逍遥は、その賞金を二葉亭や独歩などの遺族に潔く分配して、一代の大家らしい態度を示した。当時逍遥はまだシェークスピア全集の翻訳は計画していなかったので、審査会の表彰も「ハムレット」だけを目標としたのであった。

今から回顧して、これは愚かな事のように思われる。青年作家の新作にそれほどすぐれたものはなかったにしても、それを表彰して賞金を与えたのであったら、国民に与える印象は鮮明であり、桂内閣も明治文壇史上に好

感を持って伝えられるはずであった。審査員の頭脳が陳腐であったために好機会を取逃がしたようなものだ。それから、この会には鷗外の思いつきで、二、三の青年作家を洋行させるという案も提出されたのであった。小山内と私とが候補にあげられていると伝えられた。しかし、これも噂の種になったばかりで実現されず、文学審査会の何年間かの事業は、つまりは、シェークスピア、ダンテ、ゲーテ、セルヴァンテスの外国古典を翻訳することだけにとどまった。古典も結構だが、青年作家洋行のような流動的興味はない。

どうしても西洋の芝居を見物しなければ心がおさまらなかった小山内は、あてにならぬものをあてにしてはいられないといっていたが、無理工面をして、シベリア経由で外遊の途についた。私は、官費にたよってまで行きたくはなかった。無条件で行かせるといわれても、私は責任を感じて、気が進まなかったにちがいなかった。

その後、山本改造社長が、賀川豊彦の「死線を越えて」（大正九・一〇）で大もうけをしたころ、山本と賀川とが帝国ホテルで昼食をとっていた所に私も同席したのであったが、雑談の間に、山本は私に西洋へ行け、旅費は

出してやると、まことしやかにいった。当時の山本のやり口だとそんな事も、こちらの態度次第で実現されそうに思われたが、人の世話で旅行するのは気づまりのようで心進まなかった、山本の方でもそれっきり、洋行話は持出さなかったが、あの時の座興であったのか。

それでついに自力ででかけることになった。帝国ホテルで寝ているうちに、とっさに思い立ったのだが、大磯居住以来、こつこつかせいでおのずから蓄積されていた財貨は、使われ道もなくって、あくびしていたので、こういう場合にこそ造作なくお役に立った。それに改造社

円本の印税もその半分を出立前にくれる事になり、ホテルで手渡しされて領収書を書いていると、それを背後からそっと見ているホテルの事務員が「文学者は貧乏と思っていたら、案外金の入るものらしい」と云って、私も見直されたらしかった。印税の残り半分はニューヨークに着いた時に電報為替で私あてに来ていたのであった。洋行の噂がもれるとすぐに、大阪朝日記者来訪、通信の依頼あり。改造社長もホテルに来訪、これも通信の依頼であったが、中央公論に先約があったので断る。十数人のよりぬきの文壇人が臨港列車に乗じて横浜の埠頭まで

見送ってくれた。この所、私の一生での空前絶後の華やかさが出現したのであった。プロレタリア文学がますます勢いを伸ばしている文壇をしりめに、私はブルジョア気どりの旅に上った（昭和三・一一）ということでもあった。

二三　外国で実感した「日本」

――半可通の予備的知識と西洋

「僕にはまだ日本が分らないのだから西洋へ行く気になれぬ」という人がよくあった。日本が分りもしないで西洋へ行きたがる者をあざける者もよくあった。行きたくも行けない負け惜しみでそんなことをいう人もあった。私なども日本をよく知っていない。日本どころか、周囲の土地も人間もよく知っていない。百年生きていても千年生きていても、日本も軽井沢も分らぬのではないかと

思っている。しかし、そう言ったら際限がない。外国へ行って日本を見ると、かえって日本がよく分るような感じもするのである。

百聞は一見に如かず。アメリカ大陸の、国広くして、物の豊かな事は、話に聞き、本で読んで、地図ででも見て知っているはずだが、直接自分の目で見て、その広さや豊かさが分ったようなものだ。日本は小さい、日本は貧しい。外国に来てはじめてそれが分った。そんな事くらい小学生にでも分っているじゃないかと云われそうだが、私は五十歳でその土地に来て、はじめて分ったので

ある。からだの小さい私などは、小人島から大人国に来たように思われてこういう大陸に定住するには住みづらいであろうとおのずから感ぜられた。

私なども欧米を旅行している間に、黄色的日本人であることに拘泥するからいけない、身体に異状がなくって旅費に不自由していなければ、無心に旅から旅を経ていればいいのである。同じ文明国でも、欧米文明国は、東洋文明国よりも、便利に快く旅行の出来るように組織づくられているのである。そう思っていながらおりおり黄色人種劣等感に襲われるので、これも百聞一見という事

になるのだ。

私は国境の撤廃、人種的偏見消滅なんかは、少なくも近き将来にあり得べき事とは考えていないが、それは世界旅行によって、おのずから知恵をつけられたのだ。そして、不思議なのは、日露戦争の時でさえ、絶えず戦争嫌悪の思いに駆られていた私が、西洋文明国旅行中、おりおり軍国主義讃美を空想する事であった。いくさに強くならなければならぬと、おりに触れてぼんやり考えられたものだが、他の知識人はそう考えないのか。

それから、西洋は昔から今日に通じてのキリスト教国

である事が、おりに触れて、しかも痛切に感ぜられた。これは、何も、博愛とか人道とかを目標においていうのではない。キリスト教はシビヤーな教えである事、十字架の教えである事を勘定においての、キリスト教国であることを感じたのだ。

私は、ベルリンのある公園のほとりで見たように記憶しているが、そこに、地球儀を肩にし、両手で支えている青年像が据えられていたのであった。青年は全身の力を尽くして地球儀を支えているらしい。この青年像には彫刻美術としての価値はなかったかもしれないが、私は

ドイツ青年の意気込みを見たように感じた。有名なミケランゼロの「ダビデの像」にも青年の力がみられるが、私はこういう所に、古来キリスト教の精神がそれらに伝わっているのを、私は好んで見るのである。

かねてあこがれでいた西洋をはじめて見たのだから、心のとけるような思いして、人事をも自然をも芸術をもがんみしたかというにそうでもなかったようだ。幕末か明治初年に欧米に渡来して、新世界に接触した福沢諭吉や新島襄や、あるいは栗本鋤雲（じょうん）などのような、オール新奇な感じで見聞したのではなかったのだ。予備知識があ

るためかえって純真に感受されないことがありそうだ。芸術についていっても、音楽、美術、文学など、生半可（なまはんか）の予備知識があるのが玩賞の上にいいのか悪いのか。西洋小説を読んでも、オペラとか芝居とか、レヴューとかを観ても、絵を観ても、彫刻を観ても、先入主の考えなしに、はじめてそういうものに接触した方がいいのではないか。

いい音色の音楽、綺麗な絵画、面白い踊、面白い芝居の舞台模様などを、感受性に富んだあたまでそのままに見聞していればいいので、種々雑多な批評は、学究的の

も通人振りのも、漫遊客にはこうるさくなって、不必要なようにも感ぜられた。その道の専門的研究を志しているのでなければ、目に映るもの、耳に響くものを自分相当に受け入れて鑑賞していればいいのである。私はそういう心構えで、西洋を独り歩きで素通りしているつもりであったが、半可通の予備的知識があるので、ややもすれば、それに拘束されるのに気づいて、自分で自分を冷笑したくなることもあった。たとえばミケランゼロの「最後の審判」はただ薄汚いような感じがして、高貴なる宗教心も起されず、美的感興も催されなかったが、世界最

高の美術品に敬意を払わないのは不量見であると、無理強いに、我心を押さえつけて感服しようと努めたことも あった。それよりも、西洋を優等国のように思われ、自己卑下の念が、いろんな場合に起こるのを、私でも持っている伝統的国粋観で、それを強いて押さえつけて、上っ面だけ見ないで、深く見ると、日本に非常にいい所があるんだと、自分で自分を戒めることもあった。

二四　プロ文学の隆盛時代

――帝国ホテルで見たチャプリン

どうせ通り一ぺんの見物だが一年足らず西洋を回って、大いに新帰国者気取りで東京の文壇に戻って、だれもがする如くに、新知識を振り回して見ようかとひそかに志していたが、日本の文壇はひどく変っているらしかった。なまなか外国へ行っていたために、私は文壇的には時代おくれになっていたのであった。出立の際に、新聞や雑誌から原稿の依頼がいくつもあったほどだが、帰

って来た時（昭和四・一一）に、紀行文や創作の依頼に来る新聞雑誌の編集者はほとんどなかった。

「あなたのお留守の間に世の中は大変かわりました」と、ある有力な雑誌記者が、多分形式的に私に寄稿依頼をしに来た時にいった。変ったというのは、つまりはプロレタリア文学が猛烈に勢いを増したという事なのだ。

「それではこのごろは、どういう作家が最も歓迎されているのか」と聞くと「小林多喜二と徳永直の二人です」とその雑誌記者は一点の疑いも容れない信念を持っているような口調でいった。

優勝国を見物して来たつもりの私には、不在中に、二人の傑れた青年作家が日本の文壇なんかに出現したことが奇異に感ぜられたのであった。それでこの両人の新作家の名前は、今日までも心に深く感銘されているのである。

「このごろはみなさまお暇です」と、ある雑誌社の社長がいったが、この「みなさま」は、私たち旧作家をさしていうのであった。

経済界のはなはだしく不況の時代であった。大磯に定住していた私は、上京のたびに帝国ホテルに泊まっていたが、ホテルも、泊まり客が少ないので、客室の一部を

閉鎖したり、部屋代も食費も低減したりした。昼飯が二円、晩飯が二円五十銭と値下げされた。私は、ホテル生活が好きであった。人生五十の五十歳に達していたので、あとは余生といったような気持になっていた。芝居を観たり、映画を観たり、展覧会を観たり、雑誌小説を読んだりして時を過ごしていたがぼんやり見て来た西洋の風物が夢まぼろしとなって浮かんで心が豊かになるような気持がしだした。

私は、当時流行のプロレタリア文学をけぎらいするのではなく、おりおりは面白く思っていたのだが、それに

追随する気持にはなれなかった。それどころか、自然主義文学が自分の性に合わないことを痛感するようになりだした。抱月や花袋などの感化を受けて、ああいうふうな小説を、たどたどしい筆で書き続けて来たものの、世間知らずの私は、徹底した世相の写実は成し得ないのであった。心を凝らして描写を試みていたのであったが、描写の才能は私には乏しかった。それで、五十になって、今までのような態度はすてようと、自分でひそかに感じるようになった。現実の世界に拘泥しないで自分勝手な空想の世界に住んでいればいいのではないかと自己反省

しだした。西洋見物が機縁にもなったのだ。

私は、フレンチェのフイジイ博物館で見たボッチェリの三幅対をよく思い出す。「聖母と幼児」と「貝ガラに乗ったヴィーナスの誕生」と「春」と。西洋のルネッサンスについての事々しい由緒因縁は知らないのだが、こういう絵画は、私をして、豊かな夢を見せるのである。舞台のセリフでそう思うばかりでなく、街上や屋内で耳にした男女の言葉が、音楽的で、夢の国の言葉のように思い出されて、自分の空想がいろどられるのである。それは、外国語がよく分らないためなので、日本語が俗悪

であり、外国語が優美であると断定されないのであろうが、しかし、よく分らないために、音楽的に聞こえるのなら分らないことはいい事である。ある種の西洋人が、日本の能楽や歌舞伎の言葉なんか少しも分らないだろうのに、それを讃美したりするのは奇怪であるが、分らなければこそ讃美していられるのだろうとも察せられる。私が分らない西洋芸術、西洋言語を夢の国の現象として鑑賞するのと同様であろうか。

私が、プロレタリア文学の、文学的内容は乏しい、際物（きわもの）じみた文学の活躍を他所目（よそめ）に見ながら、孤独な夢を夢見

ていたころに、上山草人がアメリカから帰って来たり、ダグラス・フェヤバンクスとかいう剣劇的映画俳優がやって来たりして芸術界の余興のような一時のにぎわいを見せた。私は、ホテルにいて、これらの映画俳優の歓迎されぶりを見ていたのであったが、犬養首相暗殺当時の世相の動きをもこのホテルのロビーで見聞したのであった。そのころ、チャーリー・チャプリンがホテルに滞在していたので、この喜劇役者の無愛想な非社交的態度をおのずから持しているのを、興味をもってちらちら見ていた。十返舎一九は、愛嬌のない、そっけない堅苦しい

人間であったそうだが、チャプリンは西洋の一九かと、自分でそうきめて見ていると面白かった。

私は五十代、うかうかと生きて来て、つまりは何も知らないで、死ぬるのかと、おりおり焦燥の念に駆られることもあった。夜更けてロビーの一隅に、数人の外人が何かの洋酒を飲みながら、トランプ遊びをしているのを見ながら、我が夢を追うこともあった。

二五　『風と共に去りぬ』好評

――白鳥再度外遊、暗い時代近づく

それで、も一度西洋を見ようかと、あだなる夢を追うとした。あれから、ほぼ十年の歳月が、何をなすともなく経過していたのだ。はじめの時は、まずアメリカを見たいと思って、太平洋を渡ったのであったが、今度はロシアを見たいと思った。無論、ロシア思想にかぶれたのでもなく、深い考えはなく、百聞一見に如かずの、通り一ぺんの思いつきで、一瞥しようとしただけであった。

ようやく、わずか一週間滞在の許可を得てモスクワに赴き、大使館のあっせんによって、更に三日間の日延べを得てレニングラードにも足を留めてピーター大帝の馬上姿の彫像の据えられているほとりのホテルに宿泊した（昭和一一・七）。アメリカからの漫遊客のための遊覧自動車に便乗して、裁判所だの幼稚園だの、蓄音機などの工場を、あまり見たくもないのを見せられたが、無政府主義者として日本にも知られているクロポトキンの収容されていたという牢獄をも見せられて、これは興味があった。彼の脱獄の有様など、女性案内者のてきぱきした

口調で説明されたが、彼の部屋は広くてガッシリしていて、未知の小菅の監獄よりも居心地がよさそうに空想された。それよりも、ひとりとぼとぼとネヴァ河のほとりを歩いて、ラスコルニコッフの昔をしのぶところに、わが空想の満足が得られた。

フィンランド、スエーデンなど真夏の北欧を経て、ベルリンでオリンピックの水泳競技を観て、チェコスロヴァキアとかハンガリアとかオーストリアとかをあちらこちらに三日、五日と宿を重ね何の目的もなく自由に見物していると、おりおりもったいないような気がした。そ

の土地土地の風俗、言語、さまざまな芸術などを検討して、真相を明らかにする事なんか、有意義の事のように思われたが自分の力で探索するよりも、検討し批判するよりも、ベデカーなどの案内記によった方がたしかであり安全であり、その道の学者や批評家の説くところをそのまま受入れ受売りした方が得策であると感ぜられた。それで、百聞は一見に如からず程度の心構えで見ていればいいのだと、私は自分に説き聞かせて、うすぼんやり旅から旅を続けて巨大なるフランス船ノルマンディ号に乗って大西洋を渡ったが、船がニューヨークの埠頭場に

着いた時、英国王退位問題が耳目に触れたので、歴史的大事件を現地で見ているような気持がした。

それについで、新刊のミッチェル女史の小説「風と共に去りぬ」がアメリカの読書社会を風靡している有様が、今回の世界漫遊では、最も私の頭脳に印象された。どちらも壮快に印象されたのだ。

太平洋では日本相応の豪華船浅間丸に乗って帰国（昭和一二・二）したのだが、帰国後ひとまず帝国ホテルに泊まると、最初に無事の帰国を祝いに訪問した人があった。その人は、無事帰国のお祝いにと言って皇室の写真

帳を私の前に置いた。どういう意味がそこに存在するのかと私はけげんの念に襲われたが、つまりはそれを買えという事なのだ。写真帳と帰国とどういう関係があるのか分らなかったので、私は恐る恐る辞退したが、こういう事にも日本の時世の一面が分るのであろうかと察せられた。これも、外国旅行したために日本が分るという一例になるかも知れない。

今日では、帰国祝いと皇室の写真帳との間に何の関係もないのであろうが、あの時代（昭和一二年）には、暗々裏に関係があったらしくも思われる。私の所にのみ持来

されたのではなく、購買力のありそうな他の帰国者の所へも提出されたことであろう。こう言う事は当時の日本の特色で、西洋諸国では、こういう風習は断然ないにちがいないと、百聞一見に如かずの知識で、私は断定したのであったが、後でよく考えると、そうはいいきれないらしい。スターリンやレーニンの大きな銅像をやたらに据えつけているところを見ると、ソ連国では外国旅行帰りが、世界の理想郷たる自国に無事に帰った心祝いに、スターリン一族の写真帳を買うくらい珍しくないかも知れない。ヒトラー時代のドイツでは、何かにつけての心

祝いにヒトラーの写真帳を買ったろう。買う気がなくっても強迫的に買わされたであろう。イギリスでは、キング、クイン一族の写真帳、アメリカでは大統領一族の写真帳が、無事帰国のお祝いに買われているかも知れない。これはベデカーの案内記にも名士の紀行文にも記されていない私の独自の感想なのだが、案外真相を看破しているのかも知れない。

このごろのような飛行機旅行でも、帰国すると、無事に航空を果したお祝いに、皇室写真帳を買わされるような時代が、早晩出現しないとも限るまい。とにかく、私

が二度目の洋行の途に上る前には、二・二六事件などのあったほどで、帰国した時には、東洋の風雲はなはだ急であったのであろうが、私などいつになっても、政治の事は知らぬが仏であった。

間もなく日華事変（昭和一二・七）が起った。文壇人も昔のように超然としていられなくなって、その渦中に引きずり込まれそうになるのを、私なども危ぶむようになった。

二六　戦時下、言論の制約

――風変りの集まり・「二七会」

私は、政治問題についてはほとんど無関心で、どの政党に好意を寄せるとか、どの政党に反感を抱くとかいうようなことはなかった。たまに政治評論を読んでも身にしみて受入れることはなかった。元来社交性の乏しい私は、政治家に接触することなく、政治評論家のだれとも友人らしい関係をたもったことはなかった。

ところが、昭和の初期、私が最初の洋行から帰った時

に偶然中央公論社長に誘われて「二七会」という毎月二十七日に催される一種風変わりの会に加入して以来、しきりに政治談を耳にするようになった。この会は、民本主義宣伝の元祖みたいな吉野作造を中心として政治経済の評論家達によって始められたもので、島中雄作は中央公論を主宰するようになってから、この会の仲間に引入れられたのであった。それで、便宜上、島中が会の世話役となり、次第に中央公論社主催の会である如くみられるようになった。秋声、小剣、秋江などがこの会に加入したのも、島中の個人的関係によるので、二七会創立当

時の趣旨からいうと、私などは会員たる資格は欠いていたのであった、中央公論が次第に隆盛におもむくにつれ、会費免除となり、一切島中が負担することになった。

吉野作造は早く物故したので、私はその卓抜なる民主説を直接耳にする機会を失ったのであったが、あの時代に、吉野をはじめ馬場恒吾、稲原勝治、小汀（おばま）利得、清沢洌、佐々弘雄などが、ささやかな中華料理店などに集まって、それぞれの民主主義的、自由主義的見解によって、眼前の政治を論じ世相を批判していた光景は、さぞ精彩を放っていたのであろうと推測される。私の加入したあ

とで、芦田均とか阿部真之助とか、今日の世に活躍している傑物が、この席上に顔を見せるようになったと、私は記憶している。島中雄作没後この会も影が薄くなっているようであるが、私にとっては、この「二七会」は人生の一事実である。数十年にわたって、私はこの会に出没して、いくたの参会者が互いにとりかわしている縦横自在の言論を、傍聴していると、現実の政治や外交はかく批判すべきものか、現実の世相はかく検討すべきものかと、それによって自分のもうまいな頭脳が啓発されるような気持がしたのであった。

戦争前から戦時中、戦後にもわたって、この激しい時世の変遷につれての彼らの感想である。どれもみな、面白いといえば面白い。人によって批判ぶりが異なるとはいえ、とにかく、吉野作造を元祖とするこの会だから、軍人の横暴を憤ったり、政治家の無気力を嘆じたり、現状打開の名案もおりおり出ているようであった。しかし、いくら陰で何を云ったって何にもならぬのではないかと、私には推想された。そんなことをいって自分の鬱憤を晴らすだけではないか、と私には思われたが、実際の日本の現実にとっては、彼ら知者の名論も、畢竟は空論

であったのではないか。

「また空論を戦わすか」と、せめてもの空論の妙味を味わうつもりで、その会に出ていたことを私は人生の一事実として回顧するのである。清沢洌がそのころ私に向かっていったことがあった。「あなたなど小説を書く人は、不断通りに書いていられるんでしょう」と、それをうらやましそうにいった。彼ら政治評論家は言論の拘束を受けているのであった。

「そうです」と、私は答えた。私は多年書いて来た自分の作品で風俗壊乱の意味ででも、危険思想の意味ででも

発売禁止されたことはなかった。特別に注意して筆をとっていたのではないが、私の筆には読者を惑わし世を乱すほどの力はなかったのであろう。それでも、戦争の末期には私の作品でさえ、検閲係に気に入らないらしいと聞いたので、私は直ちに筆を止めた。止めたことを遺憾とは思っていない。

小説も戦争末期には弾圧を受けるようになったが、政治評論家ほどには執筆の悩みは感じられなかったはずだ。小説なら逃げ道がいくらもある。検閲係だの憲兵だのの鈍眼では見破られないような筆致を弄することも出

来そうである。評論家はそうはいくまい。

それよりも、私はあの当時、小説家よりも評論家よりも、宗教家の態度について思いを致した。宗教家というと、私は内村鑑三先生を思い出す癖があるのである。先生がもし生きていたら、いかなる態度をとられたか。日清戦争当時はそれを正義の戦いとして盛んに提灯持した先生も後日それを悔悟し、日露戦争のころから、徹底的に戦争排斥、軍備廃止を主張したのだが、太平洋戦争においても敢然とそれを主張したであろうか。私はそれを疑っている。知識人は甘んじて殉教者になり得られるか。

先ごろ、大宅壮一は、西田幾多郎が軍部の威力に屈服したことを指摘して「魂を売って肉体を救った」と過酷な批評を下していたが、キリスト教は西田哲学とは異なっている。本来のキリスト教は十字架の教えである。殉教を信仰の極致としている。信仰のため、主義のため身を亡ぼすことこそ、最高の願であるはず。

二七　十二月八日の思い出

――戦争と文学と宗教について

戦時中の知識人の言論行動については、戦後云い尽くされている。他を非難して自分だけ正しかったと真面目に云っている知識人を見るたびに、私はくすぐったい思いをするのである。もし日清、日露の戦争の時のように、今度の戦争でも勝利を占めていたなら、西田の宣言も燦然と光を放ったはずである。

私は、日華事変突発後、隣組制度などが設けられて、

自由が拘束され、わずらわしい思いをさされ、物資も欠乏して生活難を覚えるようになったのを悲しんでいたが、国家の大方針として戦争を続けることの是非については確信はなかった。ただ、日露戦争の時に、あんな大国と戦ったら負けるだろうと気づかっていたのと同様に、アメリカのような物資豊かな大国と戦ったら負けるだろうとあやぶんでいた程度の幼稚な単純な戦争観を持していたのに過ぎなかった。駒沢のゴルフ場で、ある海軍少佐が、「おれはアメリカを見て来たから、あの国と戦争がやれるものかと思った」と放言しているのを聞い

て、同感した程度の戦争観であった。

それで、昭和十六年十二月八日は、私の頭脳に深刻な感銘をとどめている。明治三十七年二月六日の、ロシアに対する宣戦布告は、上野の梅川楼で催された寺崎広業の送別会席上で、号外の音を聞いて知ったのであったが、あの時は、宴会の余興に延寿太夫の清元なんか聞いて、開戦の知らせもロマンチックな気持がしたものだ。しかし、今度はそうでなかった。陰惨な感じに襲われた。毎月八日の夜は、中央公論主催の国民学術教会の評議員会が開かれることになっていて、私はその日には、早めに

家を出て、銀座あたりを散歩して、丸の内の会場へ行くことを定例としていたので、十二月八日にもなにげなく家を出た。ところが目蒲線の大岡山の駅へ行って、地下の石段を下りると、新聞の号外報道が新聞の壁にはりつけられているのが、ふと目についた。真珠湾攻撃の知らせなのだ。政治外交の知識に乏しい私もさすがに驚いた。それで、みんなの意見を聞くべく、緊張した気持で会場へ行った。

この学術協会は、中央公論が谷崎の源氏新訳で意外な利益を得たので、その利益の一部を割いて創立すること

になったので、会員には、各方面の代表的学者を網羅せんと企てていたのであった。私は島中との個人的関係で、発起人となり理事にもなったのだが、二七会同様、この会にも加わる資格はなかったのだ。しかし、断片的にでも、各方面の学術的知識が得られるので、私は学校へ通うつもりで出掛けていた。

今思い出すと、十二月八日の当夜は、理事長桑木厳翼をはじめ、穂積重遠、松本烝治、牧野英一、東畑精一、清沢洌、三木清など、十人ばかりが参会していた。いつもの議論風発とちがって、憂鬱な空気がただよっていた。

なかには「これで溜飲が下がった」と空虚な笑いを浮かべた人もあった。日本の対支行動が英米に邪魔されていたのを意味していたのだ、清沢は「けさ開戦の知らせを聞いた時に、僕は自分達の責任を感じた。こういう事にならぬように僕達が努力しなかったのが悪かった」と、感慨をもらした。しかし、清沢の手のひらで、時代の激流を止める事は出来ないだろうと、私は滑稽味を感じたことを記憶している。

この夜の会合をはじめとして、私はいろんな所で時局雑話を聞かされて、不安な思いをわき立たされるように

なったのだが、国家社会の推移はとにかく、文学、ことに在来の文学、私達がかかわりを持っていた文学は、これでひとまず滅亡するのじゃないかと自分だけで思っていた。自分で時代讃美のものを書く気もなければ、時代反抗のものを書く気にもなれなかった。もうこれで一生何も書かなくなると思うと何となくせいせいした気持もした。

でも、文学報国会というものが組織（昭和一七・六）されて、私は、秋声死後には、年齢順で、その会の小説部長にならされたり、藤村死後には、ペンクラブの会長

に任ぜられたりした。報国会が出来たのはいい事なので、文学者が戦争に協力しないことはつまりは許されなかったにちがいない。時代の風潮に迎合することの好きな連中が先に立って、軍部の気に入るような会をつくってくれた事は、多数の文学者にとって便利な事であったのだ。

私は、戦争が激烈になるにつれて考えたのは、文学よりも宗教心の動きについてであった。私など文学を通じて人生を観ていたのであったが、文学の上の人生はどこまで行っても未解決の人生であり、人生を追究していったすぐれた文学ほど未解決の人生を表現していることに

なるらしい。文学の極致は宗教的信念に達すると言われているが、それは疑わしい。

宗教のうちでもかりにキリスト教を信ずるとすると「殺すなかれ」と、聖書には神の定めた鉄則として記されている。戦争に参加することは出来ないはずだ。参加しないために、ハリツケにでも火あぶりにでもされたとすると、それこそ、信者の最も理想とする殉教者であり、来世では光栄ある肉体の復活を遂げ、永遠に生きることになるのである。その境地、文学至上主義者の知るところにあらず。私にもわからない。

二八　益々激化する戦争

――軽井沢疎開、鷗外訳「うき世の波」を読む

終戦の前年の真夏は、私達は一まず軽井沢に疎開した。秋までそこで暮らして、木枯（こがらし）の吹くころには故郷へ帰ることにしようとばくぜん方針をきめていたのだが、交通が不便であったり、祖先の家に対する懐しみも起って来ないし、どこへ行っても戦時の生活難はつきまとうであ

ろうと気遣われもしたので、つまりは、冬になっても軽井沢を動かなかった。

私ははじめて高原の厳寒に悩まされながら、爆撃の恐怖からは免れているのに、多少の心安さを覚えていた。発表のあてのない原稿をぽつぽつ書きためるような文学熱は、私には欠いでいたので、燃料や食糧をかき集めるために身体を労する外には、東京から手当たり次第に持って来たわずかな書物を読むか、薄っぺらな新聞を見ておぼつかなく現実を批判するか、空想にふけって、昼夜を過ごしていたのであった。

粗末なストーブに威勢よく燃えている薪火のそばで、鷗外訳の「うき世の波」を読んで、すがすがしい気持になったことが回顧される。ステルンという作家の小品で私が年少のころ、よく分からぬながらも、夢の世界にひき入れられる思いして読みふけったのであった。「その石徳利取りて、炉の側へ寄り玉へ、おん僧。酒は年経たる匈牙利（ハンガリー）酒なり」の書きはじめから、私はほぼ暗記しているほどである。寒さきびしい山番小屋に、番人の青年が老僧と炉辺で酒酌みかわして浮世を語っているのである。「この冬の寒さ厳しかるべきは、疑ひもなきことな

り。まだ九月の初めなりしに小鳥去りぬ。狐兎の毛衣近年になき厚さなり。おん僧も庵(いほり)にて、雪にふりこめらるる用心して、薪多く運ばせおき玉へ、暁に温き床を離れて、森に出づるときは、はや冬のここちす」といっている。青年は、夕べごとに老僧に訪ねられて、杯酌みかわして山の寂しき暮しを語り、里の動静を話すのを楽しみとしながらも「されど、わが望みはたやすく絶たじ」といい「山を下りて長江大河を見んことこそ願はしけれ」という。老僧は「そは神の恵みを忘れたる言なり。ここの泉こそ、清くして飲むに堪えたれ。かしこの荒浪は、

おん身が命をも危うせん。その恐ろしさを思はで、山を下らんといふはいかに」と、青年を戒(いまし)め「事を好まず、危きに近よらぬは、神の教へなるを」と告げる。しかしこの一篇の結末では、この青年は「浮世の波に洗はれたる寂しき死人一人」となるのである。

事を好まず、危きに近よらずという老僧の戒めは、年少の私も守りかねて、われと好んで、浮世の波に漂ったのであったが、この作中の青年のように、無造作に波に洗われないで、今日まで泳ぎつづけたようなものである。でも、この激しい戦争の時代に、ことに老いたる自分な

どは、事を好まず、危きに近よらずの戒めは守らねばなるまいと、炉辺で書を閉じて思いふけったりした。

でも、私は、翌年の五月の下旬に、東京の洗足池畔の堅固なわが家が爆撃され完全に焼滅するまで大きな袋を背負って交通難を耐え忍んで、十七回、軽井沢、東京間を往復した。それで、何かの家財を運んで来た。

清沢洌が私にいったことがある、「自分はアメリカをよく知っている。アメリカは婦人の国である。そして、アメリカの婦人は、自国の軍人でも、軍事施設のない非戦闘員の住宅地を爆撃することは許さない」

それ故私などの住宅地は爆撃から必ず免れるということなのだ。私はアメリカ通のうちでも最も優秀なる清沢の説をうのみにしていたわけではなかったが、自分の家が焼けることとは実感としては感じていなかった。二、三の隣人は疎開に当って、運搬困難なものは私の家へ預けて行ったが、私の家に空室があったためばかりでなくここに置いていれば多分焼けないだろうと思ったのか。

自分の家が焼けたので、その後は上京の必要はなくなったのだが七月のうちに、情報局から参会要求の書状が来た。私は「事を好まず、危きに近よらず」という老僧

の訓戒を破って、亡びに近づきつつある陰惨な東京を見ることの興味にかられて上京した。内務省の五階が会場になっていて、その日はそこに、音楽家や落語家なども招きに応じて来ていた。戦争の終結についてこういう人達の知恵を借ろうとでもしていたのか。しかし参会者のうち戦争について意見を吐露したものはなかった。主催者の話を聞くだけであった。

私は散会後、宿を求めて近所の帝国ホテルへ行った。ホテルは半分焼けてはいたが、泊まれることは泊まれた。一食分として七勺の米を提供すれば食事にありつけた。

晩食の際に、洋酒らしいものも一杯飲まれた。人気ない、薄暗いロビーに座していると、そこらの奥の方からだれかがやって来そうな、薄気味悪い思いがされた。

自分の家のなくなった私は、今後上京のたびに、このホテルを定宿にしようと決めて、寂しい寝床についた。空襲警報は一、二度耳に入ったが、周囲は閑静なので、眠りは妨げられないはずであった。

二九　時代思想の移り変わり

――八月十五日と日露戦争当時

八月十五日の歴史的放送は、私の家の不完全な受話器で聴いた。いっしょに聴いていた隣家の婦人は「とにかく戦争はお止めになったんですね」と、安心したような顔していった。彼女の匹偶（つれあい）は長い年月戦地に行っていたのであった。私も一応安心したもののこれで世が泰平になるとは思われなかった。

例の二七会の定連である、ある政治評論家のいった言

葉が思い出された。「アメリカだってイギリスだって日本を取りゃせん。日本人が他国人に占領されておとなしくしているものか。彼等はてこずるだろう」といっていたが、なるほどそうであろうと、私もその説に同意していたので、たとえ、当局者が無条件降伏をあえてしても、一般の日本人が素直にそれを受入れることはあるまい。あちらこちらで大騒ぎが起るだろうと、私は空想していた。

終戦となっても、出版界はどうなるか。文壇はどうなるか。私はその前途に希望は寄せられなかった。日本史

上空前の敗戦のあとで文学も芸術もあったものか。いのちをつなぐだけでも容易ではあるまい。イモやカボチャばかり食っていて詩も小説も書けるかと、一途に自暴自棄的に考えたりしていたが、終戦の年末から翌年の春にかけて、薄っぺらな新しい雑誌や小冊子がぼつぼつ出現するようになった。そしてそういう粗末な物でも、案外売れ行きがいいとうわさされていた。

食物に飢えていると同様に、読み物にも飢えているので、どんなものでも一時は売れるのかも知れないが、私などのような老朽作家は、敗戦後の新しい文壇に用いら

れようとは予期されなかった。九州のどこかから出ているある同人雑誌に、戦時中その地へ来て講演をした横光利一の感想が記録されてあったが、そのうちに、旧作家の衰退を論じ、旧作家は戦争によって時世が変ったので、もはや頭を持ち上げる力はなくなっている。将来復活の望みもなしと断言していた。若い新作家が出るべきだというのである。私も横光と同様に感じていた。新しい作家が新しい目で今の社会を観察し、新しい頭で人生の真相を看破するところに文学芸術の意義があるので、旧作家の陳腐な頭脳や眼光は、この変化はげしい、敗戦後の

現代では用をなさなくなっていると信じていた。

ところが、新しい雑誌が続出し新しい出版社が続出すると、私などのところへも原稿の注文があるし、短篇集や論文集の出版もされそうになった。私でさえそうだから、戦前から人気のあった旧作家はなおさら世に迎えられるようになった。それで、戦争中は霖雨（りんう）に打たれておれた花のようであった旧作家も、雲間からもれる光に照らされて、勢いづくようになった。これも一時のいのちであるかも知れないが、横光の予想は外れたのだ。

私などよわい古希に近づいていたのに、まだ文壇の恵

みにあずかるのは、予期しない幸福といってよかった。明治時代の作家は、みな若かった。私が年少のころの文壇の最老作家は、依田学海であった。漢学者でありながら、明治の十年代、二十年代には文壇や劇界で活躍していて、逍遥、鷗外、紅葉、露伴などからも先輩として仰ぎ見られていた。私は日露戦争当時、二、三度この老文学者に会って、尽きぬ気焔を聞かされる機会を得たのであったが、幕末から明治初年にかけての、芝居や読み物の変遷推移、時代時代の光景を、その間を生きて来た人の口から、直接に聞かされるのだから、特別の興味があ

った。まだ幕府存在のころだが、師匠の使いで町へ出たついでに、市村座をのぞくと、市川小団次が、黙阿弥書きおろしの「鼠小僧」をやっていた。まだこんな俗悪な芝居をやっているかと思ったといっていた学海翁は、維新後には演劇改良を志して、忠孝劇、勤王劇などを書くようになったのだ。それよりも傍人から聞いたトルストイの戦争否定の平和論が、しゃくに触ったらしく、「口先の議論で話のきまりがつかなければ腕ずくで勝負するのはあたり前だ。トルトスイ何者ぞ。学海先生が教えてつかわす」というのだ。この二人は年齢はほぼ同じかっ

た。幕末の文人、明治の文学者で、戦争否定絶対平和を信念としていたものはなかったのではないか。

私は今、あのころの学海翁の年齢に達している。いつの間にか歳をとるものだが、時代の思想も移りかわるものである。時代を反映する文学者の態度も変って来たが一般民衆の処世態度も変って来たのか。二七会のある政治評論家の云っていた「他国人に占領されて日本人がおとなしく服従するものか」という観察も、必ずしも当っていないらしく、戦後、アメリカ軍支配の下に、徒らに刃向かうことなく、おだやかに過ごしたようであった。

この高原においても、アメリカ兵隊に敬意を表し、むしろこびを呈し、時としては、それら外国の軍人に追随して、トラの威を借るキツネの如く振舞う者さえ見られるようになった。国民精神も簡単に断定出来ないものである。

三〇　敗戦でも変わらぬ文学、芸術

――尽きぬ闘争興味、貫けるか戦争否定

人類の一人として、日本人の一人として、これほどの

悲痛な体験をしたのだから、文学者だって、在来の作品とは異なった作品を創造するであろうと、私は予期していたのであった。原稿料も戦後は急速によくなり、書物の売れ行きも、売れる作家のは非常に売れて、文学者景気が出現したのは、だれしも意外に思うところであったが、そういう事よりも、急速に言論の自由の得られるようになったことは、私には何よりも意外であった。戦時中の言論の圧迫は論外であるとして、それ以前のいつの時代にも、何らかの言論拘束はつきまとっていたのに、空前の敗戦のために、空前の執筆自由がおのずから得ら

れるようになったのは、私には何よりも意外であった。ことに天皇制に対する忌憚なき批評が、この時こそといったように、あちらからもこちらからも出て来るのは私には意外であった。

負けても勝っても戦争の力はえらいもので、東西古今の歴史は、戦争によって変化を遂げて来たのである。日本人の思想も趣味も行動も、今度はひどく変って来るであろう。私自身も環境に動かされて以前の自身ではないように変るかも知れないと、自分で自分を観察する気になっていた。

私は、羽左衛門、梅幸の芝居は、とぎれとぎれにでも長い間見続けて来たが、市村座における菊五郎、吉右衛門の芝居はそんなに見ていない。たまに観て、彼らの妙技に感心して、歌舞伎も衰えずと思ったこともあったが、どういうものか、記憶に残っていない。彼らの芝居を面白いと思っても、続けて観たくなるほどの、対演劇の情熱はかき起されなかった。戦争中はほとんど見なかった。

ところが、終戦数年後に島中中央公論社長に誘われて、東京劇場の忠臣蔵を観るに及んで珍しく陶酔状態に陥ったのだ。「忠臣蔵惑溺」と題した感想を、ある新聞に寄

稿したほどであった。当時の歌舞伎役者を網羅した大一座で、幸四郎、菊五郎、吉右衛門などが主要な老優で、私の知らない若手役者が多数出ていたようであった。忠臣蔵は昔ながらの忠臣蔵であり、俳優の所演に清新な味わいがあるのもなかったが、それでも、長かった戦争のあとで、こういう日本特有の古芸術を鑑賞し得られるのがうれしかったのか。あの一日は心とける思いしてあれを観ていたように回顧される。

あの激烈な戦争時代に心身を悩ましたあとでも私の趣味は変っていないのか。私ばかりではない、多数者があ

の忠臣蔵のようなものを愛玩するのであった。男は腹を切り、女は身を売る事を人生最高の理想としている舞台に、見物は絶好の詩を感じるのである。判官が腹を切り、勘平が腹を切り、本蔵が腹を切り、それぞれの切腹ぶりに、われわれは歌舞伎芸術をうかがうのである。戦後にこういう芝居を観て悦楽を感ずる自分の心を、私は奇怪に感じたが、そういえば小説だって同じ事だろう。「太閤記」「宮本武蔵」のたぐいが、戦前や戦時中と同様に、戦後にもうちはやされるのであった。純文学だって、相変らず、昔情調の、お古い態度や、お古い詞句が喜ばれ

ている。あれほどひどい目にあいながら、日本歴史で空前の敗戦を経験しながら、演劇や文学鑑賞の態度は旧態依然というのだから不思議である。天皇制に反抗するような、伝統的国民精神を無視する思想さえ、敗戦によって勃興したほどなのに、芸術の鑑賞は旧態依然なのか。あれほど無法に痛めつけられたのだから文学者も精神に異状を来して、作品にもその異状の精神がよどんでいるか、きらめいているかしそうなものだが、そういう作品は見つからなかった。昔ながらの人情話や武勇談が純文学のうちにも潜んでいて、それが読者を喜ばしている。

何年か何十年か経ってから戦争の真相が文学の上に明らかに描かれると、重々しく考える評論家のタイプの人もあるが、ノド元過ぐれば熱さを忘れるで、時が経つと、あの時の印象も希薄になるだろう。どんな事があっても今後は戦争に加わらないと、あの時覚悟した人間精神も、それを貫くことは出来ないで、多数者は戦争について郷愁を感じているらしく、私にはいつも見えていた。私自身もそんな感じをすることがある。

それで、あのころの盛んな戦争否定論専売の間にも、虫も殺さぬような気持になっている間にも、人は闘争興

味は忘れないのである。相手を倒して自分が勝つということに本能的に興味を感ずる限りは、その興味の道は究極は戦争に達するのである。勝負事の極致は戦争である。相手の肉体を傷つけなくっても相手の心を傷つけるのだ。フェアプレーなんて、そらぞらしい言葉である。

私は昔ながらの「忠臣蔵」を見たため芝居に郷愁を覚え、おりおり新旧の芝居を見る癖がまたついて来たが、勝負事に一切目をつぶる癖もついて来た。広い場所をとっている新聞の、さまざまな勝負事の記事は一行も読まず、パチンコ屋にも一度も足踏みしたことがない。戦争

をいとうことから、知らず知らずそうなったと私は思っている。純真の心の現れであるか。しかし、私の一生の文学行動はフェアプレーであったか、なかったか。他の知名作家の心理はどうであったか。

三一　帝国芸術院の誕生

――会員を断った藤村と白鳥

「帝国芸術院」というものの創立は日華事変の起る直前

であった。美術界にもめ事が起って容易におさまりがつかないので、それを懐柔するために、文部省がこんな計画を思いついたのだといわれていた。だから、会員は主として美術家から銓考される事になっていたらしいが、時代が時代だから、絵書きや彫り物師だけを、芸術院という新時代らしい名目をおびる制度の下の会員に抜擢するのは、量見が狭いので、会の落ち着きが悪いように思われたのか、多少の文学者をも加えることにした。それで、創立当時の情勢では、文学者は美術家のおともを仰せつけられたようなものであった。

文部省が、芸術院を造ることは不思議だ。稀有なことだ。チャンチャラおかしいというのが、文壇の世論みたようだったと、私は記憶している。新聞にも雑誌にも、芸術院に対する文壇人の批判がしきりに出ていたが、島崎藤村の感想がその代表的のもので、要を得ていたようであった。「明治以来の文学者は、政府の援助を受けず、自分自身の力でやって来たのだ。何かにつけて政府から冷遇されこそすれ、好意は持たれなかった。いまさら政府の保護を受けたくはない」と用語はどうであったか、藤村はこういう意味で、政府創立の芸術院を、あらずも

がなと批判していた。

いままで芸術を軽んじ、ややもすると不当な取締りを試みようとしてばかりいた政府が、文化国家に思いを致して、西洋にはありそうな芸術院なんか造るようになったのは、慶賀すべきことで、喜んで参加すべきであるのに、かえってケチをつけるのは、文学者には世俗人とちがった見識があるためなのか、美術家はそうは思わなかったであろう。あとで参加することになった俳優などは極めて単純に喜んだのであろう。幕府専制時代には、劇場経営者も俳優も政府から苛酷に取扱われて、彼らの事

業にも日常生活にも人間の自由は妨害され圧迫されていたので、日本特有の歌舞伎芸術の進歩発展のために政府の方では何のなす所もなかった。それが、明治の世になると政府はこの歌舞伎を外交の用器に使うことを考え、外国から渡来の大官貴顕の歓心を買うために、役者の芝居を観せたり、踊を見せたりするようになった。役者どもも、今まで見くびられていたことも忘れて、お国のお役に立つのを光栄とするようになった。藤村のように「おれたちの芝居はお上のお世話で進歩したのじゃない。自分たちの力でここまでやって来たのだ。いままでお役人

衆はおれ達の邪魔ばかりしていたのじゃないか。それがいまになって外国人のごきげんをとるために、おれたちの長い間のみがきのかかった芸を使おうとする。バカにしてやがる」とはいわなかったであろう。そんな威勢のいいタンカを切る者はなかったのだ。有難いしあわせだと、うれし涙をこぼして役人の前にぴょこぴょこしていたのであろう、

それで、藤村は、文部省の推薦に応じないで、芸術院会員たる事をかたく辞退した。私も辞退した。私の辞退理由は藤村のとは異なっていた。私は、芸術院というよ

うな事々しい組織の会員になる資格はないと思ったのだ。ろくな芸術的仕事はしていないのだから、遠慮した方がいいと思ったのだ。それで文部省の役人がしきりに訪ねて来てもかたく断った。

それが知れると、新聞社からしきりに電話がかかったり、記者の来訪があったりして、私も問題の一人になった趣があった。新聞では、なるべく辞退させるように私などをそそのかしていた。新聞記事としてその方が面白いためであった。しかし、文部省では、多勢に拒絶されては困るであろうが、二人や三人に断られたって、会の

成立にさしたる障りはないので、いい加減なところであきらめたようであった。

この芸術院は、東京会館でにぎやかな発会式は催されたが、間もなく日華事変と名づくるものが起って、世は戦争騒ぎとなり、芸術院会議の如き悠長なものは存在を忘れられるようになった。ところが、数年後に、こういう文化団体にも利用価値ありと、当局者が認めるようになったのか、新たに復活して、行動を続けることになった。それで、私なども改めて参加させられることになったのだ。徳田秋声と菊池寛とが私の家に勧誘に来た。こ

ういう時世になると、おとなしく入会して、勲三等待遇にでもなっとくのが得策であると私は気づいていたので直ちに同意した、彼らは私の家から藤村に電話して勧誘に行くことになったが今度は藤村だって片意地を張って拒絶することはあるまいと推測された。

「藤村だって、本当は会員になりたいんだな」と、秋声は後日つぶやいていたが、私はそうは思わなかった。

芸術院も次第に板について、意義ある存在となった。文部省の計画もついに勝利を占めたのである。年々の芸術院賞は、詩でも和歌でも、他の芸術でも、あの戦争時

代に適応した作品に授けられることになった。

院賞授与式は、文相官邸で行われたが。その官邸は、森有礼の暗殺された当時の古風な官邸で、私などは、そこの玄関で歴史の跡をしのんで感慨を催したのであった。

三二　文学報国会と愛国百人一首

――人類暁の詩と人類最後の詩

芸術院も戦後には態度が変って芸術界に権威あるもの

の如くなっている。授賞の方針も戦時中とは全く異なっている。戦争中は、文学報国会が情報局の支配の下に、芸術院なんかよりも勢力をもっているらしく見られたが、この報国会が、真面目くさって身を入れた主な仕事の一つは、愛国百人一首の選定であった。今はほとんど忘れられているようだが、今回顧すると、これははなはだ興味があるのである。従来の百人一首は、遊戯的文字の堆積で、一つ一つの和歌を検討すると、玉石混淆の趣があるが、長い間日本人に親しまれていたのであった。全体を通じて懐しみがあった。

愛国百人一首は、佐佐木信綱、斎藤茂吉などの現代の歌道の大家によって厳選されたもので、一つ一つを見ると、どれもみな、名歌であり、傑作ぞろいである訳だが、われわれには面白みがない。他所行きの和歌の行列みたいである。打解け難い思いがされる。これは忠君愛国主義や人道主義にこだわっての選抜であるためではないだろうか。柿本人麿呂の「すめらぎは神にしあれば、雷(いたづち)の山の上にいほりします」とか云うような和歌は、カルタ会にもふさわしくないのである。「山は裂け海は浅(あ)せなん世なりとも、君にふた心われあらめやも」は、二心

を問題にしているような感じがあって、おそれ多い次第であると、入選に疑惑をはさむ選者があるほどであったと、私は記憶しているが、こういう所は、当時の軍人も顔負けするほどの、コチコチの忠君振りが微見していたのであった。「天智天皇、秋の田の」や「ながながし夜をひとりかも寝ん」や「天の原ふりさけ見れば、かすがなる三笠の山に出でし月かも」のように気軽に歌ってはいられないのが、新百人一首であったようだ。

これを世上に流布させて「金色夜叉」の発端にあるような、新年のカルタ会に使用させようと、文学報国会で

は真面目に企てたのであった。そして、それは情報局の御意にかなって、紙不足のあのころ、立派な用紙で多量に製造され、報国会は大いに面目を施したのであった。こういう事のためなら、いくらでも用紙を配給すると、情報局のなにがしが言ったと伝えられて選者たち鼻うごめかして喜んでいたことを、私は今回顧している。しかし、この愛国百人一首を暗唱して、新玉の年の春のカルタ遊びに応用した者があったであろうか。ただ、報国会の連中が、半折か何かに一首ずつ書いて、どこかで陳列して、希望者に配布したことは、私も記憶している。私

も一首書かされた。これら一連の和歌を色紙短冊に書いてくれと、私はだれかに頼まれて、禿筆（とくひつ）を揮ってまずい字をのたくらせて、いくらかの揮毫料をせしめたことも覚えている。

あのころは戦争讃美の和歌が盛んに出現した。私は、和歌の心得はないのであるが、歌人が、殺戮を本職としている武人礼讃をするのをつねに不思議に思っていた。漢詩のうちには、戦争をのろい、遠征を悲しみ、切々として読者の心を痛ましめる作品があるようだが、日本の歌人は昔から戦好きではなかったか。

「君が代」を国歌とすることの是非がこのごろになって論評されている。これは、百人一首みたいなもので、一般民衆に親しまれていた。私など明治生まれのものには気持よく聞かれるのである。天皇制を讃美しているというような理窟にこだわらないでもいい。しいて新しい国歌をつくったって、それは、愛国百人一首みたいで、詩として優れていても、親しみをもって日本人の心に流れ込むかどうだか。

私は、学校卒業後、坪内逍遥監修の「世界文学」のうちの、イリアッド物語を執筆した。この世界最初の大詩

篇の簡単な概要を叙した小冊子であったが、自分の最初の出版物であるため、いつも懐しい思い出となるのである。それで、そのホーマーのイリアッドを、ポープの英訳によって読直したいと思って、ある書店から一本を購(あがな)い来って、「文壇五十年」完了後に巻をひらくつもりになっている。

イリアッドは人類の暁の詩である。戦争をうたったものではあるが、美女略奪が戦争の原因になったのだから、世知辛い現代の戦争に比べると風流の趣がある。人世のあけぼのが漂っているのである。このイリアッドを最初

の傑れたる詩篇として、人類最後の詩篇はどんなものであろうか。かりに原子爆弾とか水素爆弾とかによって地球が崩壊し人類が絶滅するとして、その時分に、人間最後の詩が出ないものだろうか。日本人は辞世の和歌を残すことが好きであったが、人類全体の辞世の詩を、だれか傑れた詩人が作り出すかも知れない。何処の国にそういう詩人が現われるかも知れないが、その詩も人類とともに亡ぶるのであると、今、まだ出ない前から、その最後の詩篇の内容を盲想していると、現在私が辛うじて持っている文学魂か詩心の躍動を覚えるのである。

日本文学電子図書館

文壇五十年

著　者：正宗白鳥
制作者：宮澤一郎
底　本：「文壇五十年」
中公文庫、中央公論新社
2013年１月25日 初版発行

日本文学電子図書館